
魔法少女リリカルなのは～異世界の竜騎士～

黒焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 異世界の竜騎士

【Nコード】

N70820

【作者名】

黒焰

【あらすじ】

少女は魔法と出会う。

同時期、二人の竜を使う者とある石の力によって、舞台へと降り立った……。

この作品は、私こと黒焰の二つの作品『風光の真竜』と『継承される運命』、そして『魔法少女リリカルなのは』のクロスオーバー作品です。

本編の前の時系列設定

さて、本編に入る前ですが、クロス元となる『風光の真竜』と『継承される運命』の繋がりについて説明します。

実はこの二つ、ところどころにヒントがありました但同じ世界なんです。

ただ時代がまったく違ふんです。

『風光の真竜』側でのヒントは技の名前、『継承される運命』側では竜牙の回想シーンで歴史としてヒントが出てきますから。

つまりは『継承される運命』の過去が、『風光の真竜』となるわけです。

さて、ここで『風光の真竜』の真竜杯から、なのは本編までのシヨウ、及び竜牙が関わったものを時系列で紹介していきます。

【紀元前10年】

ブラストが神竜杯優勝。

風光の真竜と呼ばれるようになる。

【紀元前3年】

モンスターの凶暴化。

一部のパートナーがいるモンスターを除き、ほぼ全てのモンスターが積極的に人間を襲うようになった。

ブラストはこの前後にシヨウと再会する。

【新暦元年】

大規模な地殻変動発生。

シヨウとブラストは地殻変動の元凶と戦い、相討ちになる。
シヨウ、享年23歳。

【新暦20年】

アオイ死去。

【新暦23年】

モンスターが大陸からいなくなる。

【新暦586年】

翼人暗殺事件にブラストらしき翼竜が出現。
(『風光の真竜』クロスオーバー編より)

【新暦1585年】

キーカス大陸東の初音で事件発生。

このとき石の力によって時空を超えたシヨウと、その力に引っ張られたブラストが再会。

守護獣契約(『継承される運命』参照)を結び、契約を成功させる。
名をシヨウからこの世界用に『帆風翔』とする。

その後、事件解決に貢献。
解決後、再び石が発動する。

【新暦1586年】

少破にて事件発生。

シルバールンクの月の墮天使が救援に向かい、見事解決させた。

（『継承される運命』の『運命交わりし時』より）

キーカス大陸南の絵亜に、滅びたとされていた翼人と海竜が出現。両者とも友好的で事件には発展しなかった。

（『風光の真竜』の『翼とAIRと海竜』より）

【新暦1587年】

キーカス大陸北の華音で事件発生。

事件後半にて、少破に駐在していた月の墮天使が救援。事件解決に尽力した。

新年度、キーカス大陸全土の養成校より、実力者が集結。理由は予知された危機に対処するため。

このとき、アオイが『神尾葵』の名前を変えて参加している。

集結と同時期に、シヨウとブラストが石の力でこの時代へと降り立つ。

自分が基となった剣術を知り、それをベースとして竜牙を師として教えを請う。

以上がなのは本編前までの時系列です。

さて、いくつかおかしい部分があります。

特に紀元前3年。

ここでシヨウとブラストが再会とありますが、新暦1585年でも再会となっています。

別にこの時系列より後に別れて、再び過去に戻って再会とかいう展開はありません。

実は新暦元年で死んだシヨウとそれ以降に登場するシヨウは、似て

非なる別人です。

正史と呼ばれるのは上記の『継承される運命』なのですが（実はクロスオーバー編が追加される前の『風光の真竜』が元になっています）、現行の『風光の真竜』はIFの世界、パラレルワールド、平行世界などと呼ばれる世界の人物です。

よって、正史におけるシヨウは石を渡したコウヘイやミスカには会っていないのです。

大体の繋がりは分かっていたただけたでしょうか？

それでは『魔法少女リリカルなのは』異世界の竜騎士』お楽しみください。

人物設定

【共通能力】

《守護獣》

人間の精神に存在するもう一つの存在。

宿る人間を主として、魔力を貸したりと力になる。

また、自身の魔力を使って、その世界に具現化する。

竜牙の守護獣は漆黒の西洋竜アルテルム。

翔の守護獣は元の世界で翼の英雄とされた翼竜人ブラスト。

《魔術》

魔力によって現象を起こす。

世界に干渉するわけではないので、別の世界でも形式が変わるわけではない。

守護獣の魔力を借りて発動させるのだが、その魔力に属性があり、その属性に係る現象しか起こせない。（炎属性だと氷を発生させることができないなど）

竜牙の守護獣であるアルテルムは光と闇、翔の守護獣であるブラストは風と光、そして翼と聖の属性を持つ。

【狩野竜牙^{かのう りゅうが}】

『継承される運命』の主人公。

黒いバンダナが特徴の比較的長身の男で17歳。

一応、翔の戦闘技術における師匠ではあるが、かなり放任主義である。

元の世界では傭兵に近い仕事をしており、その実力はかなりのもの。かなりの武器コレクターでもあり、異空間に武器をしまうことがで

きる石、異空石によって20以上もの武器を持ち歩いてた。

主要武器は血の刃を放つ血呪けつじゆと、癒しの力と爆発を起こす能力を持つ爆癒ばくいで、二刀流で戦う。

【帆風翔ほかぜ しょう】

『風光の真竜』の主人公。

銀の髪が特徴の少し幼さが残る15歳。

元の世界では、はるか昔における英雄であるが、翔自身は起こったかも知れない並行世界の人物であり、石の力で竜牙の時代へと時空を超えた経緯がある。

かつての経験により、正義感が強い。

武器はとある出来事によって受け取った二枚刃の刀、翼歌よくかでスピードに長けた戦法をとる。

第1話 時空を超えた竜騎士

ある世界の森の中……。

ズズズズズ……

空間が歪みそこから……。
ドンッ！！

「いたた……」

「くそっ……何だ？」

2人の男が時空を超えてやってきた……。

「まったく……何なんだ一体？」

原因がわからずに文句を言うこの男の名は狩野竜牙。
黒いバンダナをしているのが特徴的。

「すみません竜牙さん……」

そんな竜牙に謝っている男……少年といったほうが正しいような雰
囲気をしているのは帆風翔。

「どういうことだ？」

「それは……」

竜牙の質問に潔く答える翔。

元々翔は竜牙の世界の人間ではない。

竜牙のいた時代の過去、それも平行世界の住人である。

そんな翔が何故竜牙と出会ったかというと彼が持つ石が原因。

翔の持つ石は、彼が本来いた世界にいたとき異世界から来た（本当
は未来の世界）コウヘイから貰ったもの。

コウヘイが持つ時の力を応用して作られたらしいが不良品であった。
しかし、翔と相性が良かったらしく、その力が発動してしまったの
である。

その力は時を越えるだけでなかった。
当時は知る由もなかったが『もしもこうなったら』というIFの世
界、平行世界へと渡る力を持っていたのである。

その後紆余曲折を経て元の世界へと帰ることが出来たが、後日また発動して竜牙のいる世界へと行くことになったのだ。

その後二人の師匠に剣技を習ってきた。

一人は自分が起こしたとされる流派の末裔。

もう一人は竜牙である。

その竜牙との朝練の日。

そんなときに石の力に巻き込まれたのだ。

「そういえばクド大丈夫かな？」

翔は自分の竜牙の姉弟子であるクドリヤフカのことを心配していた。一方の竜牙はそれほど心配していない様子。

「あいつは向上心があるし俺じゃなくても大丈夫だろ」

そういうことじゃないと内心思ってたたりする翔だったが聞き流すことにした。

竜牙が人からの好意に鈍感だと思っていたからだ。

実際はそうではないのだがここでは省略する。

ちなみに翔本人が鈍感だったりする。（葵や神奈など）

合掌――

「さて、現状把握だ」

異世界にきてしまった以上その場で何が出来るか確認することが重要。

気配を探り、辺りに誰もいないことを確認してからまずは持ち物から確認することにした。

元々朝練をするために集まったうえ、いつ敵に襲われるかわからないような世界だったので武器は問題ない。

問題はないのだが……。

「竜牙さん……これは……」

彼らの目の前に広がるのは数多くの石。

二人が持つ武器を異空間へとしまうための異空石である。

そんな石が10個や20個どころではない。

数え切れないほどたくさん……。

「これでもまだ一部なんだがなあ」

苦笑する竜牙だが笑い事ではない。

翔が持っているのも2個なのだ。

それを20個は下らない数を一部といった。

一体いくつの武器を所持していたのか……。

「まあ予備で何も入れてない異空石もあるけどな。武器に関しては問題なしっ」と

翔は逆に不安だったが気にしないことにした。

「食料は……これだけか」

続いて食料の確認をしたがこれが心許ない。

元々朝練のために集まったのだから、最低限しか持ってきていなかった。

「どうします?」

「……しょうがない。とりあえず森を出て人里までいくぞ」

金銭面の問題はあったが、今この場所にいるよりかはマシだろう。

翔もそう考えていたらしく二人で森の外を目指していった。

「……普通だな」

「普通……ですね」

別になんてことはない。

出てきた場所は公園。

その周囲には家が建ち並んでいた。

雰囲気からして魔獣とかの脅威がない平和な世界……。

「参ったな……。食料は手に入りそうにないか」

あわよくば魔獣に近いものを殺して、食料にしようかと思っていた二人。

物騒だが彼らにとっては普通である。

遠出をしたときの非常食として文字通り狩って食していたからだ。辺りに一般人がいなかったのが幸いである。

「空も暗くなってきましたし」

見上げれば既に日が落ちて夕方から夜になろうというところ。

異世界ということに関わらず、地形がわからないこの土地でこれ以上何か事を起こすのは危険。

「仕方ない。今日はここで休んで明朝に動くぞ」
「そうですね」

二人は夜を過ごす準備を始めた。

……夜。

「……む」

竜牙は何か嫌な気配を感じた。
自分達の魔術に近い何かを。

「竜牙さん……」

翔も気付いたようである。
そしてその気配はまだ遠く。

「ああ何かがいる……。ただしこっちはきていない」

あつちに敵意がない以上首をつっこむのは得策ではない。
それは翔もわかってはいるはずだが竜牙は翔に任せた。

「僕は行きますよ。何もせずにいるなんて出来るはずないじゃないですか」

翔とは元来こういう者である。

誰かを守るためにその力を振るう。

しかし自分の力量というものをわかっているのだ。

この歳で。

かつての出来事が翔をそうした。

それから彼は自分の力で救えるだけの命を救おうとしている。

そんな彼が今することといったらこの気配の元を目で確認すること。
放置してしまえば何が起こるかわからない。

だから彼は行く。

自分の信念のために。

「よし、いい答えだ」

竜牙もその言葉を待っていた。

「それじゃいくぞ。この暗さならアルテルムに乗ったほうがいいな」

竜牙は黒竜の守護獣アルテルムを具現化し、その背に乗る。

「ありがとうございます。竜牙さん」

「別にいい。さっさといくぞ」

「はい!!」

翔もアルテルムの背に乗り、二人は夜の空へ飛び立った。

「竜牙さん!! あそこ!!」

音がして、そちらのほうを見ると、霊体のような黒いものが道を疾走している。

いや、滑っているといったほうが表現としては正しい。

彼らの世界にいた亡霊の魔獣、レイスにも似ていたが……。

「!? 竜牙さん!!」

翔が驚いたように言う。

竜牙が目を凝らすと、奴が追いかけている先には女の子が……。

「アルテルム!!」

すぐに気付きアルテルムが急降下。

「くらえ!!」

翔は自分の武器、歌翼を異空石から取り出し先に飛び降りる。

女の子に跳びかかった敵に攻撃を仕掛けるが避けられた。

竜牙も降りて女の子をかばうように構える。

「大丈夫か？」

「あ……はい」

慌てるか混乱すると思っていた竜牙は意外と落ち着いていることに感心した。

実際は何が起きたのかわからず呆然としていたのだが。

「よし、こいつは俺達抑えてやる。その間に避難しろ」

竜牙は赤黒い刀、血呪を取り出して振りかぶる。

「翔!!」

竜牙の声に気づき、敵を牽制していた翔は飛び退いた。

「血牙!!」

血呪から放たれた血の刃が敵に襲い掛かった。

第2話 始まりのセットアップ

その頃謎の敵に襲われていた少女、高町なのはは今日のことを振り返っていた。

何故こんな事態になったんだろうと……。

事の発端は学校からの帰り。

塾へ向かう途中、公園の林道を通ったことからだった。

「あれ？」

その場に立ち止まったなのははこの道に見覚えがあった。

初めて通った道にも関わらず。

それもそのはず。

見たのは夢の中だったのだから。

夢の中で男の子と何かが戦っていた。

その場所が……この道のどこか。

「どうしたのなのはちゃん？」

すずかの問いになんでもないと答えるのは。

しかし何か甲高い音と共に助けてという声がすると、そうも言っていられなくなった。

「どうしたのよなのは？」

「何か聞こえない？」

アリサとすずかは顔を見合すが二人とも首を振る。

なのはだけがこの音が聞こえているようだ。

どこから聞こえてくるのか確かめるため、なのはは集中した。

(……助けて)

「こっちだ！」

突然走り出したなのはに驚きつつも、アリサとすずかは追いかける先に駆け出していたなのははしばらくすると、小さな動物が倒れていることに気づいた。

その首には赤い宝石のようなものがあつた。

自然と見つめあう形になるひとりと一匹。

「どうしたのよなのは！？」

遅れること数秒、アリサとすずかが追いついた。

「あ、見て……動物？ 怪我してる……」

すずかが状態を見てそう言うのだった。

その後話し合いの末、動物病院に見てもらうことにした三人。

その動物病院にてなのはがその小動物、フェレットらしきものと目を合わせた。

それに対して指を差し出すとなのはの指を舐めた。

なのはたちはそれに感動していたが、フェレットの体力が持たなかったらしくそのまま倒れてしまった。

残念そうにする三人だったが、後日改めてくることにして、動物病院を後にして塾に向かった。

塾の授業の合間に三人で誰が預かるか相談する。

だがアリサは犬、すずかは猫を飼っている。

なのはの家も喫茶店で基本は飼えない。

だが一番可能性があるなのはが家族に聞いてみるようになった。

夕ご飯のとき、なのはは家族に動物を飼いたいという事を相談した。父親である士郎がフレットを知らないというハプニングがあったものの、なのは自身がちゃんと世話をするという条件で了解を得る。そう決まってアリサとすずかにメールで報告をしたとき。それは起こった。

キィィンッ

（聞こえますか……僕の声が聞こえますか……？）

なのはの頭に誰かの声が響く。

それはなのはが昨夜見た夢と昼間の声と同じ声。

（僕に力を貸してください！！）

焦る声。

なのははその声があのかのときのフレットのものと思った。

（お願い……僕のところに来て！！ 時間が……危険がもう！！）

そこで声が途切れた。

声を聞くのに集中しすぎたのか、なのははベットに倒れこむ。
しかしすぐに起き上がった。
あの声の主を助けるために。

急いでフェレットを預けた動物病院へと走るなのは。
たどり着くと声が聞こえる前のあの甲高い音が頭に響いた。
同時に病院内で何かが壊れる音。
急いで中に入ろうとしたなのはの視界の端に、庭を駆けるフェレットの姿。
それを確認してなのはが駆け寄ろうとしたそのとき。

ズドンッ!!

「あっ!!」

何か黒いものが木に衝突して反動でフェレットが中を舞う。
幸いなのはのほうに飛んでいたフェレットをしっかりと受け止める。
なのははその黒いものをみて呆然としていた。

「きて……くれたの？」

胸元からの突然の声。
それは確かにフェレットが発した声だった。

「しゃべった!？」

驚くがそれどころではない。

木に衝突していた黒いのが動き出していた。

そしてその赤い目がなのはを捉えた。

危険を感じ取ったなのははすぎに走り出した。

「その……何が何だかよくわからないけど一体何なの!？」

なのはが抱えるフェレットは、自分がこことは違う世界から来たという。

フェレットが言うには、なのはは素質があるらしい。

自分だけでは遂げられない思いを遂げる力。

だから素質を持つなのはに協力を求めた。

「お礼はします! 必ずします! 僕の力をあなたに使ってほしいんです」

その力は……。

「僕の力を……魔法の力を!!」

「……魔法？」

そのとき黒い物体が襲い掛かってきた。

「くられー!!」

突然男の子、翔が黒い物体に飛び掛りその刀、歌翼で攻撃する。

「えっ!!?」

驚くのはをよそに構える翔。

攻撃は避けられたが、なのはに攻撃がくることはなかった。
するとまた男の人、竜牙がどこからともなく現れる。
両手に刀を持つてなのはを庇うように……。

「大丈夫か？」

「あ……はい」

突然のことになのはは間の抜けた返事をしてしまった。

「よし、こいつは俺が抑えてやる。その間に避難しろ」

フレットが「そんな無茶な!!」というが聞こえなかったらしい。
間合いにも入っていないのに一方の刀を振りかぶる。

「翔!!」

その声に黒い物体と戦っていた翔がそれから離れる。

「血牙!!」

なのはとフェレットは驚いた。

振り切った刀から紅い斬撃が飛び、黒い物体に襲い掛かっていた。

「魔法！？でも魔方阵はなかったし……」

フェレットも知らない技術による攻撃。

驚くのはだったが……。

「ねえわたしはどうすればいいの!？」

「……あの人達に任せるのも一つの手だけど、僕たちのものとも違うみたいだし……」

フェレットは迷っていたが決心がつき、なのはのほうを見た。

「これを！」

そうやってなのはに手渡したのは、フェレットの首についていた赤い宝石。

それは仄かに暖かった。

「それを手に目を閉じて心を澄ませて。僕の言うとおり繰り返しして」

なのはは言われたとおり目を閉じる。

「我、指名を受けし者なり……」

「われ、しめいをうけしものなり……」

目を閉じてもわかるくらいに光が輝く。

「契約の元、その力を解き放て！」

「えっと……けいやくのもと、そのちからをときはなて！」

宝石がなのはの声に鼓動した。

「風は空に。星は天に！」

「かぜはそらに。ほしはてんに！」

キイインッ

甲高い音がなのはの頭に響く。

「そして、不屈の心は……」

「そして、ふくつのこころは……」

誘導するフェレットの声となのはの声が自然と重なっていく。

「「この胸に！」」

なのははさらに強い鼓動を感じた。

「「この手に魔法を……レイジングハート、セットアップ！」」

Stand by, ready, set up!

第3話 魔法の呪文はリリカルなの？

「この手に魔法を……レイジングハート、セットアップ！」

Stand by, ready, set up!

その言葉とともに光が増し、天に届く……。

「!？」

「なんだ!？」

その光に戦っていた二人と黒い物体が動きを止める。

黒い物体は怯えているようにも見える。

ただなのはだけが現状に困惑していた。

「なんて魔力だ……」

この現象の元であるレイジングハートを渡した本人……。

といってもフェレットだが。

その光景に驚いていた。

それでもはっと気づき説明する。

「落ち着いてイメージして。君の魔法を制御する魔法の杖の姿を。そして君の身を守る強い衣服の姿を！！」

いきなり言われてなのはも困っていた。

しかしそれでもイメージする。

魔法の杖……。

身を守る衣服……。

「とりあえずこれで！！」

「……成功だ！」

なのはが気づくと、先ほどイメージした衣服を纏った自分の姿が。魔法の杖に白い衣服。

「えっ、えっっ！？ うそ！？ なんなのこれ！？」

……まあ驚くのも無理はないが。
しかしなのはが驚いている間に、黒い物体のほうは体勢を整えていた。

「ゴオオオオオッ！」

「あつ!？」

「しまった!？」

竜牙と翔は先ほどの光景に気を取られていて、黒い物体に抜かれてしまった。

黒い物体が狙うのはなのは……!!

「きます!」

「きゃっ!？」

突然のことになのはは目をつぶってしまった。
しかし。

P r o t e c t i o n .

黒い物体が何かにぶつかり、鈍い音が響く。

黒い物体はその衝撃に耐え切れず、周りに被害をもたらしながら飛散した。

「え……ふえ？」

その光景に驚くのは。

「光の……結界？」

そう言ったのは翔。

近いものを自分も知っていたからだ。

「おい、小物」

竜牙のその言葉に「こ、こもの!？」とフェレットが言うが、実際見た目はそうである。

「あれで終わったわけじゃないよな」
「……はい」

フェレットが言うには、あれは忌まわしい力の元に生み出された思念体らしい。
いくら攻撃しても死なないはずだと竜牙は思った。
あれを止めるには少女の持つ杖で封印して、元の姿に戻さなければいけないらしい。

「なら俺達はいいつを足止めする。いいな翔」
「当然。封印のほうはお願いするね」
「無茶です!! これ以上この世界の人を巻き込むわけには……」
「もう巻き込んでんじゃねえか。その少女を」

「うつ」とフェレットは言葉に詰まる。
竜牙の言うことはもっともだ。

「それに僕たちはこの世界の人間じゃないしね」
「? それはどういう……」
「……そんなこと言ってる場合じゃないぞ」

竜牙の言葉に全員がそちらに向くと、飛散した欠片を集める黒い物体が……。

「いくぞ翔」
「はい!!」

翔は剣を、竜牙は両手に刀を持ち黒い物体に攻撃を仕掛けた。

「はっ！」

「たあっ！」

少しずつ……だが確実に思念体にダメージを与える二人。

その立ち振る舞いが相当の場数を踏んでいるのはなのはでもわかる。剣術をやっている自分の兄と姉と同じ雰囲気だったから。

フェレットもなのはと同じように見ていたが、自分の役割を果たすことにする。

「今はあの人達に任せて封印の準備をしましょう」

「あ、うん」

フェレットが使う魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式。

術者の精神エネルギーが鍵となって発動すること。

先ほどのような防御や攻撃などの基本魔法は、心に願うだけで発動する。

しかし封印のような大きな魔法は呪文が必要になってくる。

「呪文？」

「心を澄ませて。心の中にあなたの呪文が浮かぶはず」

そう言われてなのは目をつぶり、集中する。

「……うんっ」

どうやらうまくいったらしい。

「準備が出来ました!!」

フェレットは戦っている二人に合図を送った。

二人は頷き、最後の足止めをする。

「飛刃!!」

翔の持つ歌翼に風が収束する。

その剣を振るうとその風が斬撃に乗り、思念体に攻撃する。

「爆癒」

その言葉とともに竜牙の持つ、もう一方の刀『爆癒』が光り輝く。

大きな音とともに爆発が起こった。

二人の強力な攻撃に思念体の動きが完全に止まる。

「いくよ。リリカルマジカル……」

なのはは呪文の詠唱に入る。

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード!」

「ジュエルシード封印！」

Sealing Mode・Setup・

なのはの言葉とともにレイジングハートの姿が変わる。

杖の先の部分に光の翼のようなものが4枚……。

リボンのようなものが現れ、思念体に巻きつく。

そのとき思念体の額のような場所にローマ数字でXXIと現れる。

Stand by・Ready・

「リリカルマジカル。ジュエルシードシリアルXXI！ 封印！」

Sealing・

呪文の詠唱が終わると、さらに無数の光の束が現れる。

ただし先ほどのように巻きつくわけではなく、思念体を貫く。

思念体は大きな悲鳴をあげて消え去った。

「終わった？」

聞いたのは翔。

「あつ」

なのはは思念体が消えた場所に何かあるのに気づく。

「これがジュエルシードです」

見た目は青い宝石。

「レイジングハートで触れて」

レイジングハートで触れるとジュエルシードは中に吸い込まれた。

R e c e i p t N o . X X I .

封印が終わるとなのはの体が光り輝き、服が元に戻った。
その手には宝石に戻ったレイジングハート。

「……終わったか」

「はい。あなた達のおかげで。ありがとう……」

そこまで言っているとフェレットは安心したのか倒れた。

「ちょっと、大丈夫！？　ねえ！」

なのははフェレットを抱き上げた。
そのときパトカーの音。

周りを見渡せば普通ではありえない戦いの爪あとが……。

「……よくわからんがやばいのか？」

「えっと……かなり」

「……逃げたほうがいいんじゃないあ」

翔の言葉に残りの二人が頷く。

「こい。アルテルム」

逃げるために自分の守護獣を具現化する竜牙。

「えつと……ドラゴン?」

普段ならもつと驚くところなのだが、先ほどまでそれに匹敵する出来事に立ち会っていたため、なのははそこまで驚かなかった。

「乗れ。逃げるぞ」

竜牙が手を差し出す。

ちなみに翔は既に乗っている。

「うんっ」

なのははその手を取りアルテルムの背に乗った。

「いくぞ。振り落とされるなよ」

夜の闇に黒き竜が飛び立つのだった。

第4話 次元世界と異なる世界

夜も更け、辺りも暗くなった公園に1つの大きな影が降り立った。
その背には3人の人影。

「ここなら大丈夫だろ」

「うんっ」

なのは、竜牙、翔である。

あの場合から逃げたあと比較的人が少なそうな公園に来たのだ。
3人が降りると黒き竜は消えた。

ちなみにここは竜牙と翔が野宿しようとした場所である。

「んっ……」

なのはの手の中にいたフェレットが起き出した。

「あ、起こしちゃった？」

なのはが謝る。

「怪我のほうは大丈夫？」

翔がフェレットの身体に巻かれている包帯を見て聞く。

「怪我は平気です。もうほとんど治っているから」

そう言うとフェレットは身体を震わせて包帯を解く。
なのはが見るが怪我の跡はほとんど消えている。

「残った魔力を治療に回せましたから」

「でも完全につてわけじゃないだろ」

竜牙が二刀のうちの白い刀をフェレットのほうに向ける。

「えっ！？ なになに？」

「大丈夫だから」

驚くのはに翔が声をかける。

「な……なにを……」

「黙っている。ヒール」

そう唱えるとフェレットの身体が輝く。

「……すごい。残っていた怪我也も治っていく」

フェレットは純粹にその力に驚いていた。

「ジュエルシードのときといい今といい……あなたたちは？」

「……それより名前知らないんだが」

竜牙の言葉で誰一人自己紹介をしていないのに気づく。

「それじゃあわたしから」

そう言っ始める。

「わたし高町なのは。小学校3年生。家族とか仲良しの友達はこの

はっと言えます」

次にフェレット。

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノが名前です」

そして竜牙。

「狩野竜牙だ。こことは違う世界から来た」

最後に翔。

「僕は帆風翔。まあ竜牙さんがこの世界にきた原因っていうのかな」

そういつて苦笑する。

自己紹介が終わるとユーノはすまなそうな顔でなのはを見た。

「なに？」

「すいません……。なのはさんを巻き込んでしまいました……」

「あ……その……」

竜牙と翔は知らなかったが多分魔法のことだろうと思った。

この世界とは無縁そうな力。

多分ユーノがなのはに力を与えたのだろう。

それを悔やんでいる……。

「多分わたし平気っ」

まあなのはなら大丈夫だろうと二人は思う。

二人（一人と一匹？）とも似たような雰囲気があるから……。

「で、俺達のことだったか？」

「あ、そうです。時空管理局の人……じゃないですね」

「時空管理局？」

どうやらユーノの話では、無数に存在する次元世界を管理、維持する司法機関らしい。

竜牙はそんな数の世界を管理仕切れるわけないと思っていたが、
ともかくそこが管理している世界のどこの術式とも竜牙達と違うと
のこと。

まあそれも当たり前なのだが……。

「聞いた話だとかかなり術式は違うみたいだが……多分この世界の元
から違うんだろう」

「どういことですか？」

「うん。これは推測なんだけど……」

翔が話すのは世界の成り立ちそのもの。

『石』が原因で様々な世界、時間を超えてきたからこそわかったこ
と。

世界には様々な分岐点がある。

たとえば今日このときになのはが竜牙達と会わなかったら。

そもそもなのはがユーノを見つけてなかったら。

そんな様々なＩＦの一つで世界が成り立っている。

そして竜牙達がいた世界は世界そのものが生まれる際のＩＦの世界。
時空管理局が竜牙達の世界……魔術というものを見逃すとは思えな
いのでそうなのだろう。

「あと俺達の魔術に興味があったよな」

「はい……。プログラムを構築していたわけではないみたいですけど」

「僕達のは守護獣から魔力を借りて発動しているんだよ」

「あ、さっきの？」

竜牙と翔は肯定。

しかしユーノは疑問顔。

眠っていたので見ていないのだ。

「言うより見たほうが早いな。アルテルム」

その声に反応して黒い竜が竜牙の隣に現れる。

「ド、ドラゴン!？」

ユーノが驚くのも無理はない。

ユーノの世界でもドラゴンはかなり高位の魔法生物。

そのドラゴンの間近で自分を見ているのだから。

「……竜牙。食っていいか？」

「「しゃ、しゃべった!?!?」」

なのはとユーノがともに驚く。

そういえば飛んではしゃべってなかったなあ気づく翔。

竜牙はしゃべるのは普通じゃないのかと思っていた。

「やめとけ。腹の足しにもならんだろ」

「て! ちょっと!」

「冗談だ」

ユ一ノにとっては死活問題である。

「ま、俺達の中にはこういう奴らがいるんだ」

飯とか俺らが食っていれば大丈夫だから楽だぞ。と簡単にいう竜牙。そこで『俺達』の部分になのはが気づく。

「……ということは翔さんも？」

「うん。僕のはブラストっていう竜人だけだね」

一通り説明は終わったか……と思っていた竜牙はあることに気づく。

「なのはだったか？」

「はい。そうですけど……」

「この世界じゃどうなのか知らんが時間いいのか？」

あつ……と今頃気づくのは。

出ていった時間もそうだが今はかなりまずい。

「にやはは……まずいかも……」

顔に大きな汗を貼り付けながら苦笑する。

「しゃあない。俺がついていつてやるよ」

「にゃ!?!」

突然のことに驚くのは。

「夜中に一人で帰らせるわけにはいかないだろ。翔もいくか」

「はい。……なのはちゃん？」

「にゃ！？ あ、うん……」

翔の言葉で復活する。

「あの……僕はどうすれば……」

なのはが混乱していたせいで忘れかけられたユーノ。

「あ、ユーノくんはうちに来てね。他にもいろいろ聞きたいこともあるし」

「うん」

「そんじゃいくか」

もう少しで高町家に着くというとき……。

「そういえば竜牙さん達はどつするの？ 異世界から来たんだつたら寝るところとか」

なのはの問いに言ってなかったかと気づく竜牙。

「言ってなかったか？ 俺達はさっきの公園で野「なのは」？」

咄嗟にユーノを後ろに隠すのは。
声に気づき前を見ると……。

「お、おにいちゃん……」

なのはの兄、高町恭也が立っていた。

「こんな時間にどこにお出かけだ？」

少し怒っているようにも見える。

こんな夜更けに出歩いていたのだから無理もないが。

「あの……その……えっと……えっと……」

なのはは何をいったらいいのか混乱している。
それを見かねて竜牙が助太刀することにした。
ユーノを掴み上げる。

「こいつが気になったみたいだな。たまたま捕まえていた俺を見つけたってわけだ」

「あんたは？」

気になってはいたがなのはを優先していたようだ。

「翔です」

「狩野竜牙だ。旅人って感じかな」

さすがに異世界からきたとは言えないので誤魔化すことにする。
翔もそれはわかってるので突っ込むことはしない。

「あら、かわいい」

「おねえちゃん？」

家のほうからなのはの姉、美由紀がユーノを見て言う。

「なのははこの子が心配で様子を見に行っただのね？」

「えと……あの……」

「ま、その帰りの途中で危ないから着いてやったという訳だ」

突然の美由希の言葉に便乗して、竜牙が苦笑しながら言った。

「あ、そうです」

翔も竜牙に続いて言う。

「だからといって内緒でというのはいただけない」

「まあいいじゃない。こうして無事に帰ってきたんだし」

あんまり無事ではなかったような……と思うのは竜牙と翔。

「それになのはいい子だからもうこんなことしないもんね」

美由希はなのはに問いかける。

「うん。その……お兄ちゃん、心配かけてごめんなさい」

なのはがそういうと恭也は頷いた。

「それじゃ俺達はこれで」

そついつて竜牙と翔は公園へ向かう。

「あ、竜牙さん達はどこで寝るの？」

なのはは先ほど聞けなかった事を聞いてみる。

「えつと……公園で野宿をしようかと」

翔がそう答えると、高町三兄妹は顔を見合わせる。

「？」

「何だ？」

二人が疑問に思っていると……。

「ここにはどのくらいいるつもりだ？」

恭也が聞く。

「あゝ………当分いるつもりだが」

当てなんてないしとは二人の共通の見解。

「だったらうちに泊まりなよ。部屋は空いてるし」

そう言うのは次女の美由希。

「……いいのか？」

「だめ？」

竜牙の問いに問いで返すのは。

「えつと……それじゃよろしく願いします」

折れた翔。

ちなみに竜牙はどっちでもよかったです。

「よし決定」

「うんっこれからよろしくね。竜牙お兄ちゃん。翔お兄ちゃん」

こうして竜牙と翔の高町家への居候が決まった。

……ちなみになのがお兄ちゃんといったときに、恭也の殺気が翔に直撃したのは余談である。
竜牙は飄々としていたが。

第5話 それぞれの立場

「ふわあゝ」

朝の日差しを受けて翔は目を覚ます。

ここは昨夜居候することが決まった高町家の一室。
元の世界でもかなり早起きだった翔。

今、5時半過ぎである。

さすがにいつもはそこまで早くはないのだが。

ガラガラッ……。

「ん？」

控えめな音がかすかに聞こえた。

気になった翔はその音がした方向、玄関のほうへ下りていった。

翔が玄関を開けるとなのは兄である恭也と姉の美由希がいた。運動しやすい格好になっており、どこかに行こうとしていたところだった。

「恭也さん、美由希さん」

「翔君？」

翔がここまで早く起きるのは想定外だったらしく恭也は驚いていた。

「あ、今日はたまたまですけど起きるのは早いほうですよ」

「そうなんだ」

美由紀は笑って言った。

「恭也さん達はどちらに？」

「うん。ちょっと走りこみ」

翔は昨夜竜牙が恭也に何かやっているのかと聞いていたのを思い出した。

同時に二人が剣術をやっていることも。

「僕もついていっていいですか？」

「結構速いけど大丈夫か？」

恭也が聞いてくるが翔は自信満々。

伊達に竜牙の二人目の弟子をやっていない。

「大丈夫ですよ。僕もちよつと鍛えてますから」

そついつて刀を振る動作をする。

「……いいだろう」

その振りを見て何か感じ取ったのか真剣に答える恭也。

「だけど追いつけたらな」

「追いつきますよ」

両者不敵な笑み。

「なんか嫌な予感が……」

美由希が何か感じ取るが既に遅い。

「じゃあ始めるか」

「はい。レディ……」

「ゴー!!」

翔と恭也は全力で走り出した。

……美由希を置いて。

「うわーん！ やっぱりー!!」

男二人を追いかける美由紀の姿が近所の噂になったのは別の話。

「……ねみい」

遅れること一時間。
竜牙が起き出した。

「……知らない天井だ」

突然奇妙なことを言い出す竜牙。

（竜牙。誰もいないのに言っても虚しいだけだぞ）

それに答えるのは長年の相棒であるアルテルム。

「まあそうだな」

その皮肉にも気にした様子もなくそのまま起き上がる。

♪
♪

「ん？」

（目覚まし時計……か？）

携帯の存在を知らない竜牙だったが居候がぐうたらしているのもど

うかと思って部屋を出た。

ガチャッ

「あ」

「よう」

ちようどなのはが部屋から出てくるところに遭遇したので挨拶をする。

「おはようございます。竜牙お兄ちゃん」

「キコ」

ユーノはなのはの部屋から挨拶。

しゃべるのはなのはの家族にばれるといけないので、こういう形になるのは竜牙も翔も承知済み。

「そうだユーノくん。竜牙お兄ちゃんにも通じるかやってみたら？」

なのはのその言葉に疑問を浮かべる竜牙。

ユーノが目をつぶり、何かを念じているようだが……。しばらくするとユーノがなのはに向かって首を振った。

「そっか。竜牙お兄ちゃん達のはユーノくんと違うみたいだからしょうがないのかな？」

「何の話だ？」

竜牙はまったくわからないのでユーノに聞いてみた。

「えっと……心で会話するっていうものなんだけど」

要約すれば念話というものである。

そのことを聞いて竜牙はあることに気づいた。
普段の自分達は魔力を持っていない。

だがその念話に多少でも魔力が必要なら……。

「ユーノ。もう一回やってみてくれないか？」

「キュツ？」

ユーノは一瞬考えたようなそぶりをしたが実行する。

（……どうですか？）

（ああ、ちゃんと聞こえる）

どうやら成功したようである。

「やっぱりな」

「えっ？ できたの？」

「う、うん」

先ほどまでできなかったのに今度はできたことに疑問を抱くユーノ。
竜牙は簡単に説明することにした。

「俺達には守護獣がいるってことは話したよな？」

その問いに二人とも頷く。

「でだ。俺達が魔術を使うのは守護獣から魔力を借りてるから。じやあなんで俺達自身が魔力を使わないと思う？」

「えーっと……」

(……もしかして魔力がないからですか?)
「ユーノ、正解」

竜牙の世界では魔術を使う者は多いが魔力そのものを持つ者は少ない。

ハンター全体の数からの割合でいっても5%を軽く下回る。

だがそれがアルテルム、ブラストをはじめとする守護獣やその世界での脅威、魔獣となると必ず魔力を持っている。

自身の身体の構成に魔力を使うからだ。

魔獣はその魔力を使い魔術を使う。

それは魔力を持たない人間からは脅威でしかない。

あちらの世界の人間も基本的なスペックはこちらと変わらない。
だからこそ守護獣は人間に力を貸し魔力を提供する。

「ま、そういうわけで通常は魔力を持たないただの人間だからな。
ちよつと魔力を借りていた訳だ」

(そっか。念話はリンカーコアを持つ人に反応するんだから擬似的に魔力を与えれば……)

「そういうわけだ。あとで翔にも言つて、常に魔力を宿しておくようにするから」

(はい)

「えーっと……よくわからないけど竜牙お兄ちゃん達にも念話が繋がる様になつたってこと?」

話についていけなかったなのはが困惑気味に自分の解釈を言う。

「ま、そういうわけだ」

「おはよう。お母さん」

「おはようございます。桃子さん」

「おはよう。なのは」

リビングへと降りる二人……と一匹。
迎えたのはなのはの母親、高町桃子。

「おはよう。竜牙ちゃん」

「……ちゃんづけは止めてもらえませんか」

さすがに竜牙の歳でちゃん付けされるのは恥ずかしいらしい。

「うふふ。気が向いたらね」

元より変えるつもりはないような言い方。
竜牙は落胆して諦めた。

「お母さん。お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」

なのはがそう聞いたところで竜牙が翔もいないことに気付いた。

「二人なら翔君を連れて訓練にいったぞ」

士郎がそれに答えた。

それで翔が早起きだということを思い出した。
同時に恭也と美由希が剣術をやっていることも知っていたので、訓練にはなるなとも。

「「「ただいま」」」

ちょうど竜牙がそう思っていたとき三人が帰ってきた。

……一人だけ落ち込んでいるようだ。

「うう……翔くんに負けるなんて……」

「美由希……後でおしおきな」

あううと頂垂れる美由希。

いくら多少は実践を積んでいても翔はその最前線にいたようなもの。
初見で負けるような鍛え方もしていない。

その翔は恭也の言葉に苦笑。

多少責任を感じているようだが、手加減するほうが相手に失礼というもの。

「それじゃあ朝ごはんにしましょうか」

「それじゃいつてくる」
「いつてきまゝす」

高町家の子供達は学校の時間。
そして竜牙は……。

「じゃあ行こうか竜牙君」
「了解。士郎さん」

高町家が営んでいる喫茶翠屋の手伝いである。
一日交代での、翔とのローテーションで手伝うことになっている。
居候させてもらっている身であるため、このくらいのこととはしよう
という判断。

一日交代なのは、ジュエルシードの発動のとき片方は戦闘できるよ
うにすること。
あとはこの町に慣れるための自由時間である。

（竜牙さん）

翠屋に向かう途中ユーノから声がかかった。

（なんだ？）

（あなた達の世界のこと、詳しい話を聞きたいのですが……）

少し考えるも情報交換は必要だと判断した竜牙。

（いいぞ。何が聞きたい？）

（はい。それでは……）

だが竜牙にはひとつだけ、絶対に話さないと決めていることがあっ

た。

竜牙の戦う目的。

翔にも、元の世界の誰にも話していない竜牙自身の秘密。

それは竜牙本人が解決しなければいけないことであるのだから……。

「さあ、ここが翠屋だ」

竜牙はユーノと念話で話しながら店を見る。

そのときは知らなかったが、それはユーノ達魔導師にとって必須スキルであるマルチタスクであった。

しかしその程度なら竜牙の世界でも、武器での攻撃をしながら魔術の構成などを行っている。

だがそのことについて疑問に思う者もなく、ただ当然のこととしていたのだ。

これが後に竜牙達ハンターにさらなる力を与えることになるのだった。

「……綺麗な店ですね」

ともあれ土郎の案内で着いた店、翠屋。

竜牙は率直な感想を述べる。

竜牙の世界にも喫茶店はあったが、男には入りにくい雰囲気のものが多かった。

比べてこっちは誰でも気軽に入れる雰囲気かしている。

「ははっありがとう。それじゃ着替えてくれるかな」

そういつて渡されたのは翠屋の制服。

「はい」

「うん。かつこいいわね」

「おだてても何も出ませんよ」

着替えを終えた竜牙の姿を見た桃子が感想を言う。
そこでただひとつ変わらないものに注目がいった。

「そのバンダナは外さないの？」

竜牙が頭に付けている黒バンダナのことである。
これにも秘密があり、外すわけにはいかない。

「これがないと落ち着かなくて」

竜牙は無難な答えで返す。

「まあいいけどね」

了承を貰えたことで竜牙は業務を始めた。

第6話 翔と狼

なのはは学校、翔は散策中に、竜牙は翠屋での仕事中、ユーノからの念話が届いた。

内容は今回の事態に対する説明。

ジュエルシードはユーノが異世界で発掘した古代文明の遺産。

その数は21個で本来は手にした者の願いをかなえる魔法の石。

だが力の発現が不安定で、単体で暴走し周囲に危害を加えることがあるという。

さらには人や動物を取り込んで暴走することもあるらしい。

（なんと言うか……）

似たような事態を知っている竜牙は少し複雑だった。

そのジュエルシードを運ぶ輸送艇が何らかの事故に遭い、ジュエルシードがこの地球に落ちてしまったとのこと。

完全に予測できない出来事であったが、発掘した本人であるユーノは責任を感じていた。

自分が発掘したものがこの世界を危機にさらしている。

そのことがユーノに枷を如いているのだ。

さらにユーノは自分が回復したら一人でジュエルシードを探索すると言う。

無論なのはと翔はユーノのその言葉に反対。

竜牙もなのは達には賛成だったが、ただ単に感情論ではなくユーノ自身にその力がないことで反対だった。

ジュエルシードは残り１９個。

そんなかなりの数であるにもかかわらず、一つ封印するにも苦戦するユーノではすべてを封印するのは無理だろう。

さらにそれはこの町を危険にさらすことにもなる。

そのためにも力がある者が確実に封印することが必要である。

そんなこんなで竜牙が考えている間にも、ユーノが一人で解決させるといふ話は反対されて、竜牙自身も含めたなのは達が封印にあたるということが決まったようである。

（あ、そういえば竜牙さん達は封印はできるんですか？）

そんなとき、ユーノが竜牙達に対してそんなことを聞いてきた。

ジュエルシードへの対応が基本封印だけに必要なことであろう。
だが……。

（悪いがその辺りは専門外だな）

彼らの世界では魔獣という人間に対しての脅威があり、戦闘経験はあるものの危険物を封印という考えはなく、基本的に破壊が主となっている。

それは彼らが使う魔術の性質も一つの問題になっていた。

竜牙や翔の使う『魔術』にはユーノやなのはが使う『魔法』と同じく魔力を使って発動するのだが、その魔力がまったく違うのである。基本的に『魔法』で使われる魔力は純粹魔力、例えば無属性の魔力を使っている。

それに対して『魔術』は魔力そのものに属性が付いており、竜牙が

闇と光、翔が風と光と翼と聖を持っている。

さらに発動される魔術は術式にも寄るが、その属性から連想できるものしか発動することができない。

風ならば突風、光ならばそのスピードでの移動、闇なら消失といった具合である。

逆に風が炎そのものを操ることはできないし、光が暗闇を作り出すことはできないといった応用性の欠如といった欠点も持つ。

そのためか封印をしようにもそれぞれの属性で偏りがあり、逆に危険にし兼ねないということから、常識として破壊に移っていたということが考えられた。

（まあそういうわけだから俺と翔が翠屋の手伝いを交互にやるんだがな）

（幸い戦闘には自信があるからね。なのはちゃんの手伝いにはなるよ）

（あ、ありがとうございますっ！？）

そのとき念話と行動が一致してしまい、机に頭をぶつけてしまったのはだった。

（ジュエルシードが発動しました！！）

ユーノから竜牙と翔にその連絡が入ったのは3時頃。
なのははちょうど帰宅途中だったようで、そのまま発動場所に向か
っているらしい。

（翔、いけるな？）

竜牙はまだ翠屋の手伝い中で手が離せない。

（はい。ユーノ、案内頼めるかな？）

（魔力をある程度放出してもらえればそれでなんとか）

（わかった。お願い）

幸い翔がいた場所からジュエルシードの発生地点は近かったらしく、
すぐに傍まで着いた。

（この上でいいんだね？）

（はいっ、僕となのはもすぐに追いつくので！！）

（了解っ）

たどり着いたのは石段の前。

その上には神社があり、暴走体はそこにいる。
そう確認した翔は一つの魔術を発動させる。

「羽ばたけウィンドリム」

翼属性の魔術、ウィンドリム。

それにより、翔の背中に風の翼が現れた。
術の発動を確認すると神社まで一気に飛翔する。
そこには一体の狼型の暴走体。

「黒いフェンリル？ …… そこまでは強くなさそうだけど」

翔はその姿を見て元の世界の氷を扱う狼の長を思い出したが、最強種と今回の暴走体では力の差がありすぎる。

一方の暴走体は突然現れた翔に驚いて動けずにいたが、しばらくすると翔に向かって牙をむき出して威嚇し出す。

「……いくよ」

翔は刀、翼歌を取り出して構えると翼を羽ばたかせて暴走体に向かって急降下。

そのまま暴走体に向かって翼歌を振り抜くが、暴走体はその見た目通りの身体能力で後方へと跳躍して避けた。

それに対して翔は驚くこともなく、追撃のための行動に出る。

「飛刃！！」

翼歌を振るった軌道に沿うように、視覚できるほどの密度を持った風の刃が発生して暴走体へと向かう。

風の刃はそのまま暴走体へとぶつかるが、威力不足でたたらを踏ませるに過ぎなかった。

なかなかの防御は高いらしく、低級の魔獣ならば倒せるレベルだったのだが暴走体はそれ以上だったようだ。

すぐに体制を立て直して飛び掛る暴走体に対して、冷静にウィンド

リムの風の翼で空へと回避する翔。
さらに掌を暴走体に向けて魔術を放つ。

「イノセントノヴァ！！」

光の放流が翔の掌から放たれ暴走体に接触、爆発が起こった。
爆煙が辺りを覆い、暴走体の姿を隠してしまう。

「や、やった？」

「なのはちゃん！？」

そのとき現れたのはなのはとユーノ。

今さっき着いたばかりのようで音と爆煙だけで判断していたようである。

だが翔が驚いたのはなのはの格好。
魔導師が纏う防具、バリアジャケットではなく聖祥小学校の制服。
そしてそのことを危惧する理由は……。

「まだ完全に倒れてない！！」

「えっ翔お兄ちゃん！？」

暴走体はまだ倒れていなかった。

爆煙から姿を現し、翔となのはを交互に見た。

「なのは、レイジングハートの起動を」

「えっ、起動って何だっけ？」

その暴走体に見られているなのはは漫才のようなことをしていた。
なにやら『我は使命を』から始まる起動パスワードを忘れたらしい。
それを察知したのか、ただ単に弱そうだからなのか暴走体なのは

に向かって駆け出す。

「っ瞬光!!」

それを確認した翔は、なのはを守るために光の移動魔術を発動させる。

次の瞬間には暴走体を軽々と追い越し、なのはの背後にいた。そこでさらに魔術を発動。

「守れ！ プルム・リリーブ!!」

その発動で翔の体から二対の翼が現れてなのは共々その姿を覆い隠した。

「えっ何？」

「翼？ 一体どこから!？」

「二人とも衝撃に備えて!!」

「翔お兄ちゃん？ きゃ!？」

翼の壁に暴走体が衝突する。

二人は突然視界を遮られて戸惑っていたが、翔の声と衝撃で大体の察しがついた。

元々多数を一人で相手にすることが多く、さらには守るより避ける事を得意としていた翔。

対広域殲滅系ならまだしも、このような状況での防御はそこまで得意ではなかった。

完全に防ぐことはできず、衝撃が彼らを突き抜ける。

「僕があれをなんとかする。その間に封印をお願い!」

「う、うんっ。ユーノくん」

「わかった。我、使命を受けし——」

翔の指示で、ユーノが改めてレイジングハートの起動パスワードを言ったときだった。

S t a n d b y r e a d y

「えっ？」

「レ、レイジングハート？」

S e t u p .

レイジングハートの突然の起動。

それは完全にレイジングハートがなのはを主として認めた証でもあった。

なのはの服がバリアジャケットに変わり、その手には杖となったレイジングハートが握られる。

「いくよ！」

「はいっ」

翔はなのはの返事を合図に、姿を覆い隠していた翼を勢いよく広げる。

ちょうど接触していた暴走体はその勢いに負け、後方へと飛ばされるがすぐに体勢を立て直して再び飛びかかる状態。

だがそれは翔も承知のことですでに次の手を取っている。

なのはより前に出た上空から掌を暴走体に向けていた。

「エアブラスト——！」

翔の魔術によって突然発生した突風が暴走体の動きを封じる。

その間になのはの詠唱が完成して、光の帯が暴走体の体に巻きついた。

その額にジュエルシードの刻印、??が浮かび上がる。

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル??封印!」

暴走体が叫びをあげながら光に包まれる。

するとジュエルシードが本来の姿を現して、なのはのほうに落ちていった。

なのはがレイジングハートをジュエルシードに向けると、レイジングハートが回収。

「これで……いいのかな?」

「うん。これ以上ないくらい」

こうしてなのはの二つ目のジュエルシードの封印が終わったのだった。

IF1? 翔と妖弧（前書き）

翔となのはが2つめのジュエルシードの封印を成功させた二日後、
翔はまた鳴海市を散策していた。

これはありえるかも知れない一つの出会い。

今回はそのときの出来事を見よう。

IF1? 翔と妖弧

「結構高いな」

僕はこの前ジュエルシードを封印した神社にきていた。

一昨日もかなり歩いてはいたけど、こっちは来てなかったしあんまりのんびりしていられなかったしね。

(……ここ翔と美由希が勝負した場所の近くだぞ)

あれ、そうだったけ？

でもあのときは森の中だったし……。

……ま、いつか。

目の前には鳴海を一望できるような光景。

空を飛んでいるかのような風景が広がっている。

でもやっぱり……

(空を飛ぶなんてダメだからな。見つかったらどうする?)

ははは……ブラストはお見通しか。

実際僕は飛べるんだけど、騒ぎになっちゃいけないからね。

前の世界では問題なく飛んでいたんだけど……しょうがないか。

僕はその場に寝転がって空を見る。

——平和な世界。

僕が今までいったことのある世界は、なんらかの危険と隣りあわせだった。

でもこの世界は違う本当に平和な世界。

これを壊しちゃいけない。

だからもつと頑張らないと！

「よしっ」

気合を一発入れて起き上がる。

ガサガサッ

その瞬間近くの茂みが揺れた。
何かと思っただが敵意はなさそう。
しばらく待つと……

「……狐？」

首に鈴をつけた子狐が現れた。
僕を見て少し警戒しているみたいだ。
でも僕は別のことが気になった。
他の人からはただの子狐に見えるだろう。
でも僕は違う。
僕には何か不思議な力を持つものを見分ける力がある。
それがこの子狐からも感じるということは……

「……妖狐？」

僕がそういつた瞬間子狐がさらに警戒を強めた。

……しまった。

前の世界、竜牙さんの世界では普通でもこっちじゃどう思われているか解らないんだよね。

この反応だとあまりいいとは言えないんだと思う。

「大丈夫だよ。僕は君を攻撃したりするつもりはないから」

僕は安心させるように近づく。

しかし子狐のほうは何かされるのかと思ったらしく僕を睨む。
そして……

パリパリッ!!

電撃が僕を襲った。

「くっ!?!」

(翔!!)

「大丈夫だから……」

僕は尚も近づく。

ここで逃げたら何も変わらないから……。

近づいては電撃の繰り返しが何度続いた。
何度攻撃されても怒ろうとしない僕に警戒を解いたのか、子狐が僕

に近づく。

「うん。いい子だ」

僕はその頭をなでてやる。

気持ちよさそうにそれを受ける子狐。

そのうちに僕の手が怪我しているのに気づいたようだ。

「クーン……」

自分のせいで傷つけたのを謝っているらしい。

「大丈夫だよ」

僕がそういうも手の傷を舐める子狐。

僕はそのまま子狐が満足するまで頭を撫でて待った。

やがて満足したのか顔を上げる。

「僕は翔。君は？」

そう聞いた瞬間子狐が光を放ち、なのはと同じくらいの少女に姿を変えた。

「……久遠」

「久遠か。いい名前だね」

人の姿をとった久遠に僕は驚いていた。

前の世界では人の姿をとると記憶と命を削るといわれていたから。

でも自由に姿を変えるところを見ると大丈夫なんだろう。

そう思いながら久遠の頭を撫でていた。

IF1? 翔と妖弧（後書き）

とらハ3から久遠登場です。

今後登場するかは完全に未定です……。

第7話 魔術構築

ユーノ、竜牙、翔が高町家にお世話になって一週間。

プールでジュエルシードが発動したときは竜牙と翔が共に翠屋で手伝いをしていたため、なのはとユーノだけで封印。

ちなみに二人の容姿が噂となって、女性客が増えて売り上げが上がっているらしい。

そして前日の夜、竜牙の援護で5つ目のジュエルシードを封印したが……。

「なのはちゃん、だいぶ疲れがたまっているみたいですね……」

「元々運動もあまりしていなかったみたいだからな。たった一週間であれだけの荒事に関わったんだからしょうがない」

5つ目のジュエルシードを封印した後、なのはが倒れたのだ。

幸いただの疲労で竜牙が背負って帰ることではなとかなったが、今後は何か考える必要があるだろう。

「それに……あいつは少し危険だ」

そんな話の中、竜牙は突然そんなことを言い出した。

「それはどういう……」

その言葉が気になった翔が聞こうとしたときだった。

なのはの部屋と扉が開き、なのはが出てくる。

「あ、竜牙お兄ちゃん。翔お兄ちゃん。おはようございます」

「おう」

「おはよう。なのはちゃん」
「キユ」

それぞれが挨拶をして、朝食へと向かう。

「さっきの話題はまた今度な」
「あ、はい」

小声でそんなことを話す二人だった。

時間は過ぎ、それぞれが外に出る。
なのはは休日で、友達と高町父がコーチをするサッカーの試合の観戦。
翔は翠屋の手伝い。
そして竜牙はといえば……。

「光を曲げ、我が姿を隠せ、リフレクトプリズム」
(ダメだな。ぜんぜん姿を隠せていない)

人目につかない町の外れにある森の中で魔術の構築を行っていた。魔術の存在が常識となつてゐる彼の世界とは違い、この世界ではなのは達が使う魔法と共に異常。

そのため扱いには注意が必要で、人の目に触れないことが大前提となる。

そのため、ジュエルシード発生現場に迅速に向かうために使える魔術が使えない状況にある。

翔のウィンドリムや竜牙の守護獣アルテルムによる飛行。

短距離ながら光速で移動することが可能な瞬光がこれに当たる。

どちらも移動には十分な効果を発揮する代物ではあるが、人目につきやすい。

ならばと竜牙が考えたのが一般人から自分達が見えなくなる魔術。

光の屈折を利用した魔術を構築しているのだった。

彼らの魔術は一定の法則に基づいた魔方陣と想像によって発動される。

魔方陣と想像、その二つが合つて初めて魔術として完成し、少しでもずれていればまったく発動しないか、似て非なるものができてしまう。

翔と比べて魔術との付き合いが長く、既にいくつかの独自で編み出した魔術、固有魔術がある竜牙だからこそできることである。

(だが……)
「どうした？」

何かに気付いたのかアルテルムが口を開いた。

（妙なことに魔力はおろか気配すらも感じられなくなっているぞ）
「……………何？」

アルテルムのその言葉に、傍に飛んできた蝶をゆつくりと掴もうとする。

——普通は避けられるはずの手に蝶の羽が触れた。

「これは……………」

（完全に気配を断っているからだな。ゆつくりで風もぶれていなか
ったから触れたんだろう）

構築している魔術が意図していたものと違う場合でも、別の形で一
つの結果を成すことがある。

そしてこれも偶然によって生み出された一つの結果。

「……………使えるな」

（ん？）

「いや、なんでもない。別の術式を試すぞ」

場所は変わって翠屋。

ここでは竜牙に変わって翔が店を手伝っていた。

ちなみに竜牙と翔の二人は、その容姿もあつて（二人ともあまり自覚はない）ひそかな人気になっている。

そこへサッカーの試合を終えた士郎が、試合を終えたサッカー少年達と共に入店した。

「おかえりなさい士郎さん。試合はどうでした？」

「勝ったぞ。これからちよつとした祝勝会だ。なのはが外のほうにいるからオーダーとってきてくれないかな」

「了解です」

「や、なのはちゃん」

「あつ翔お兄ちゃん」

オーダーを取りにきた翔に対し、朝に翠屋の手伝いを知っていたなのは普通に答える。

しかし一緒にいるアリサとすずかにとっては、鳩が豆鉄砲を食らったような状況だ。

なのはの兄が恭也だけなのは、二人とも長い付き合いなので知っている。

にもかかわらずなのはが『お兄ちゃん』と呼んでいるのだ。

「オーダー取りに来ただけどどうする？」

「え〜と……ショートケーキに何か飲み物を。アリサちゃん達はどうする？」

「えっと……同じものを」

「同じくです……」

「了解。じゃ、ちょっと待っててね」

しかも実際の年齢より幼く見えるものの、かつこいい部類に入る翔。その翔が店内へと入る。

残るのはなのはとアリサ、そしてすずかの三人。

この状況での次の展開はもちろん……。

「なのは!!」

「なのはちゃん!!」

「えっ!？」

なのはに詰め寄るアリサとすずかの二人。
そして……。

「あの人とはどういう関係なの!!？」

二人同時にそう言われた。

そのことで混乱したなのはさらに地雷を踏んでしまう。

「し、翔お兄ちゃんはこの前から家に居候して……」

「居候!!？」

この後、口を滑らせてしまったなのはは、二人に翔のことを問い詰められるのだった。

「……あれ？ 何故か惜しいことをした気がするのに安心してる……」

平行世界ではアリサとすずかの二人にもみくちゃんにされたユーノ。しかしここでは空気扱い。

どちらがいいのかは……人それぞれである。

第8話　なのはの決意

祝勝会も終了の時間となり、解散するサッカー少年達。

——そのとき、少年の一人がバッグから取り出した何かが気になったのはだったが、気のせいだと思って放置してしまった。

それとほぼ同時に解散するなのは、すずか、アリサの三人。
なのはが若干疲れているのは言うまでもないだろう。

「翔君」

「土郎さん、なんですか？」

三人娘が解散する準備をしているとき、土郎が翔に話しかけた。

「一旦家に帰るつもりなんだけど翔君はどうする？」

監督といえどスポーツをした後の土郎。

そのまま仕事に移るわけにもいかない。

翔はいえは客入りのピークを過ぎているので休憩に入ってもいい時間。

「そうですね……。これが終わったら一回戻ります」

そういつて翔が指すのは祝勝会で溜まった皿。

「そっか。それじゃ先に戻らせてもらおうよ」

「はい」

翔は皿の片づけを終え、一旦高町家へと戻る。
家の前に来たそのときだった。

（翔！！）

独特の魔力の波長にブラストが気付き、翔に呼びかける。

「うん。ジュエルシードだ！！」

それは翔も気付いていた。
今までと比べても大きい魔力の波長。

「翔お兄ちゃん!!」

なのはも気付いていたのか、走って家から出てきた。

「なのはちゃんいくよ!」

「……うん」

何故か落ち込むなのはに気付かないまま、二人は現場へと急ぐのだ。
った。

その魔力の波長は遠く離れた竜牙にも届いていた。

「ジュエルシードか!!」

（しかもかなりでかいぞ!!）

だがさすがに現場から遠い。

「いくぞアルテルム。出す!!」

（了解!!）

ゆえにアルテルムを具現化して、先ほどとりあえずの完成をした魔

術を発動する。

「ミストミラーズ」

黒い霧が現れて竜牙とアルテルムの姿を包む。

そしてその黒かった霧は、水粒の一つ一つが光を乱反射させて中にいる竜牙達の姿を見えづらくした。

「……これでいいんじゃないか」

「あくまで見えづらくしただけだ。それに闇魔術のダークネスワールドを基にしているから光と風の翔には使えん」

ダークネスワールドは周囲に闇の霧を放ち、視界を隠す闇の魔術。

そして竜牙が今回使ったミストミラーズは、ダークネスワールドに光の乱反射という要素を加えた光と闇の複合魔術。

竜牙が考えているのは翔でも使える光のみの魔術のため、この魔術では意味がないのだ。

「それもそうか」

「——いくぞ!」

翔となのは、ユーノは道のあちこちが破壊されていたことにより、近くにあったビルの屋上へ出た。

目の前に広がるのは……大きな樹、樹海。

「人間が発動させたんだ……」

ユーノが現状を見てそう判断する。

強い想いが一番強い力を発揮する、特に人間ならば尚のこと。

「わたしのせいだ……」

人間が発動させたということではは気付いた。

翠屋で気になったあの少年が、ジュエルシードを持っていたことに。

「えっ？」

「なのは！ 翔！」

翔がなのはのつぶやきに反応するが、その前に上空から竜牙が現れる。

「竜牙さん。どこから？」

「アルテルムだ。見えづらいが注視すればわかるだろう」

翔がよく見ると上空にどこか違和感のある靄のようなものが見えた。あれがアルテルムなんだろうと翔は納得する。

「わたし、気づいていた」

そのなのはの言葉に翔は驚き、竜牙は訝しむ。

そんな二人の反応を見ないままになのはの独白は続いた。

あのときに気付いていれば、こんな事態にはならなかったのにと……。

「こんなことになる前に……止められたのに……」

「なのは……それは」

「——お前は何のためにジュエルシードを集める？」

なのはの後悔にユーノが元氣付けようとしたところに竜牙が口を挟む。

「竜牙さん？」

それは昔、竜牙が翔に問うた言葉だった。

言葉そのものは違うが意味は同じ。

それは力を持つ者、その力を振るう者に必要な決意。

「わたしは……ユーノ君を手伝うために」

「——僕は守るために剣を取った」

「翔お兄ちゃん？」

竜牙の言葉の意味に気付いた翔は、当時竜牙へ返した答えを再び誓う。

あの日、助けられなかったかもしれないことに対する想いでもあるその誓いを。

「自分に出来る力の全てで……守れるだけ守るために」

竜牙は自身の能力故に、更なる強さの高みを求めて。

「俺は自分自身がどこまで強くなれるか。どこが限界か知るために。」

この二人は理由は違えど、自分の信念のために力を振るっている。

「元々危惧していたことだ、なのは。手伝いというのは、あくまで他人のすることの上乗せでしかない。お前自身がしたいことはなんなんだ？」

「わたし……は」

「ちっ！ 邪魔だ！！」

なのはが迷っている間に突然現れた大樹の根。

竜牙が気付いてイノセントノヴァで吹き飛ばす。

だがそれでもなお、大樹の根は竜牙達を目掛けて成長していく。

「いくぞ翔。これ以上被害を増やさせるな！！」

「了解！！」

竜牙は再びミストミラーズの中のアルテルムに乗って、根の対処に回る。

「ウィンドリム！」

翔も風の翼を出して、今だ成長する大樹へと向かった。

「な、なのは……」

ユーノが心配する最中、なのはは竜牙の言葉の意味を考えていた。

——竜牙お兄ちゃんが言いたいこと……少しわかる。確かにわたしはユーノ君の手伝いで魔法を使いを始めた。

——でも今は……。

「ユーノ君、こういうときはどうしたらいい？」

「えっ、……うん。封印するためにはまず元を見つけないと……」
「元を見つければいいんだね」

なのはがレイジングハートを手に構えると、巨大な魔方阵が発生した。

「見つけて……災厄の根元を……」

光球が辺りに飛び回る。

それはエリアサーチと呼ばれる魔法。

光球はなのはにそこからの景色を見せる……。

次々と移り変わる景色……。

「見つけた!!」

エリアサーチによって見つけたジュエルシードの位置は大樹の中心。

「封印を!」

「ここからじゃ無理だよ」

「できるよ!」

この事態は自分の油断が招いたこと。

自分ももっとしっかりとした意思を持っていればとなのはは思う。

だからこそ新たに、自分自身での意思を持ってジュエルシードを集めるために……。

「できるよね。レイジングハート」

T h a t r i g h t .

なのはがイメージするのは、先ほど竜牙が放ったイノセントノヴァ……。

S e a l i n g m o d e .

レイジングハートの形が変わる。

狙うジュエルシールドまで一直線に！

S t a n d b y r e a d y .

「ジュエルシールド、シリアル10封印！」

光の放流が突き進み……封印が完成した。

「答えは見つかったか？」

「うん」

竜牙の問いに、なのははしっかりと頷いた。

「わたしはこの町を守りたい。だから、自分の意思でジュエルシールドを封印する。」

ドを集めることにする」

夕暮れに染まる町の中でなのは決意した。

「……ま、及第点だな」

第9話 偶然の出会い（前書き）

今回はあの少女が正史より早く登場。

第9話 偶然の出会い

大樹のジュエルシード事件から数日。

竜牙の懸念であったなのは内の思いも、ある程度改善した。

竜牙が口を出さなくても大丈夫であったかもしれないが。

平日であるためなのは学校、今日の翠屋の手伝いは翔。

竜牙はいえば、未だ完成していない光単体での隠匿魔術。

遅く起きて朝食を取っていた中、今日はその魔術の構成をしようとしていたそんな朝。

「あら、なのはったらお弁当忘れてる」

きっかけは桃子のそんな言葉。

なのはの通っている学校、聖祥大付属小学校は給食ではなく弁当持参である。

このとき、竜牙は嫌な予感がした。

だが逃れるすべはなく……。

「竜牙ちゃん。ちょっと届けてくれない？」

予想通りの展開に竜牙はため息を吐いた。
ともあれ自分は居候の身。

このくらいのことなら聞かないわけでもない。
だが一つだけ訂正させておきたいことがあった。

「いい加減ちゃん付けやめてくれないですか？」
「考えておくわね」

これはダメだと竜牙はため息を吐くのだった。

「あ、お弁当……」

なのはが休み時間にかばんを開けたところ、お弁当がなかった。
忘れてきたと落ち込むのは。

「なのは、どうしたの？」

そんななのはの様子に気づいたアリサとすすかが話しかけた。

「う、うん……。お弁当忘れちゃったみたいで」

「誰あの人？」

「高等部の人かな？　かつこいいよね」

なのはが理由を話しているとき、廊下のほうが騒がしくなっていた。しかもその騒ぎは段々と近くなってくる。

「誰か来たみたいだけど……」

すずかがそんなことを言った次の瞬間、教室のドアが開いた。そこから顔を出したのは、なのはにとって意外な人物。

「ん……おっなのは」

「竜牙お兄ちゃん！？」

なのははびっくりするのだが、当の本人である竜牙は気にした様子なし。

そのままなのはの元まで歩いていき、目的の物を差し出した。

「ほれ、弁当。忘れてっただろ」

「あ、ありがとう」

目的を終えた竜牙はすぐに教室から出ていった。

……騒動の種を残して。

「なのは！！ どういうこと！？」

数秒の硬直の後、そう言ってなのはを問い詰めるアリサ。

「そうだよなのはちゃん！！ 誰なの！？」

さらに追従するすずか。

「えーっと竜牙お兄ちゃんとは翔お兄ちゃんと一緒に居候……」

「あの人も！！？」

さらに悪いことに、以前と同じく混乱したなのはがまた口を滑らせてしまう。

前回はアリサとすずかの二人だけだったが、今度は学校の教室内に、教室にいたクラスメイトも、なのはに対して何か聞きたそうなのであった。

結局、前回より大規模な質問攻めが始まるのだった。

そんな事になっているとは露にも思わない竜牙。

だが彼は意外な窮地に陥っていた。

——何故に？

「……迷った」

好奇心から通った道と違う道に入っただのがいけなかった。たった一本外れて少し進んだ後、なんか違うと思って方向を修正しようと思ったところ、さらに迷った。

その後も元の道に戻ることができずに、どこかのマンションの前で頭を垂れる竜牙であった。

実は竜牙がこういった事態に陥るのは初めてである。というのも、元の世界ではよくアルテルムに乗って、空から目的の場所に行っていたからだ。

そのため竜牙自身、自分が軽度の方向音痴だということを知らなかったのである。

「さて、どうすっかな」

そう言っただけに聞こうと辺りを見渡した竜牙の目に、一人の少女の姿が目に入った。

「悪いがちょっといいか？」

「はい？」

竜牙が話しかけたのは金色の髪を持つ少女。

なのはと同じくらいの歳の様で、その金色の髪をツインテールにし

ている。

その姿に元いた世界のある人物が思い浮かぶが、瞳の色は違って赤だった。

「あ、あの」

急に声をかけられた少女は戸惑っていた。

竜牙が少し呆けていたのも理由ではあったが。

少し顔が赤いのは……まあ置いておくでしょう。

「悪い悪い。翠屋つて場所探しているんだがどこにあるか知らないか？」

地元では有名ならしい翠屋ならば大丈夫だと思った竜牙。

そこからなら道が分かるというのも理由の一つ。

「えっと……私もこっちに來たばかりで……」

「どうしたんだいフエイト」

少女が回答に困っていると、見た目竜牙より少し下くらいの歳の女が近づいてきた。

少女には似ていないものの、気軽に話しかけているのを見ると姉のような存在のようである。

「えっと道を聞かれて……翠屋つて知ってる？」

「あゝ悪いねえ。あたし達も最近ここに來たばかりでさ」

さすがに來たばかりだと知らないのも無理はないだろう。
なので竜牙は質問を変えることにした。

「ここの住所ってどうなっている？」

さすがにおおまかな地形は地図を見て把握している。

そのため現在地が大体どんな場所なのか把握しようと、聞いたのではあるが……。

「えーと、なんだったっけ？」

「遠見市だよ。アルフも覚えないと」

地図を思い出してその位置関係を把握した後……竜牙は地面に手を付いて頂垂れた。

「え、えっ？」

「どうしたんだいあんた？」

突然の行動に驚く二人。

竜牙自身もおかしな行動だと思っではいたものの……。

「何故に隣の市まで来てんだ俺……」

さすがに落ち込むのだった。

「えっと……どうしたんですか？」

「ああ……実は……」

「アハハハッ!!」

「アルフ笑いすぎだよ……ふふっ」

さすがに少し気に障るものの、落ち込みのほうが強くと、笑われるがままの竜牙。

「ま、大体の位置はわかったし俺は行くとするよ」

そう言つて去ろうとし……何かを思い出したように二人に振り向く。

「俺は狩野竜牙。また今度会ったらなんか奢らせてもらつよ」

「あたしはアルフだよ」

「フェイト・テストロッサ」

「ん。それじゃまたな」

それだけ言つと竜牙は高町家へと向かった。

——結局着いた頃には日も落ちていてまた落ち込んだが

アルフside

「面白い奴だったね」

まさか迷って隣の市まで来るとはね。
くくっ……まだ笑いが止まらないよ。

「うん」

おや、フェイトの顔が赤い……。

「フェイト……もしかしてあいつに惚れた？」
「えっ！？　そ、そんなことないよ！」

おやおや、まさかフェイトがねえ。

「ま、結構かつこよかったし。フェイトが惚れても無理はないか」
「うっ……」

あたしも気に入っだし、また会えるといいけど。
でもまあ……。

「ジュエルシードだっけ？ それを集めないかね」

第10話 騒乱の月村家

「んあ？」

竜牙の間の抜けた声が高町家の朝に響いた。

「えつとね。今日すずかちゃんのお家に行くんだけど……」

「いや、それはいいんだが……なんでそれに俺も行くことになってるんだ？」

なのはの言葉に疑問で返す竜牙。

事の始まりは竜牙がなのはに弁当を届けたことがきっかけとなる。

既に翔のことを知っていたすずかとアリサは、さらに竜牙まで居候していることを知り、言ってしまうえば興味津々であった。

本人達に自覚はないが、なのはの兄である恭也と同等のかっこよさを持つているためである。

「というわけでちゃんと二人連れてくるのよ！」

「あうあう……。でも翔お兄ちゃんも竜牙お兄ちゃんもその日は翠屋の手伝いって言ってたし……」

「い・い・わ・ね？」

なのはが戸惑いながらも反論するが、アリサは怒気を漂わせて言い放つ。

「す、すずかちゃん……」

なのははすずかに助けを求めるが……。

「なのはちゃん、お願いね」

笑っているのに笑っていない笑顔で言われて、首振り人形のように頷いたのだった。

アリサまで引いていたのはご愛嬌だろう。

「でもなあ……」

居候である以上、忙しい休日にこそ手伝いたいと思っていた翔。竜牙も翠屋の手伝いのほかに、術式の構成を完成しなければならなかったため渋る。

「あら、こつちなら大丈夫よ」

桃子の鶴の一声。

「いつも手伝ってもらってるからたまにはね」

（歳相応の言動を……！？）

竜牙の守護獣であるアルテルムがそう口にした瞬間、殺気が竜牙に向いた。

アルテルムが具現化していない以上声が聞こえるわけがないのだが……。

「竜牙ちゃん、何か言った？」

笑っていない笑顔でそう竜牙に聞く桃子。

その勢いに負け、首を横に振る竜牙。

アルテルムのせいであるが故に、主である竜牙のせいでもあるが理不尽である。

「……しゃあないな」

竜牙は好意を無碍にするわけにもいかず了承。
翔も頷いてそれに答えた。

「それじゃいくぞ」

恭也が先導していることに疑問を持つ二人。
そのことに気づいたのか美由希が答える。

「今から行くすずかちゃんのおうち、お姉さんの忍さんなんだけど

ね。恭ちゃんの彼女さんなんだよ」

……。

二人の沈黙が続く中恭也が弟子に向かって何を言いかとチョップ。

「…………マジですか？」

「そこまで驚く事か？」

月村家へと向かう道中。

バスに乗っているときに恭也が竜牙に聞いた。

「いや、鈍感そうなんだな」

翔も同じだがと思う辺り、自分は勘定に入れてないらしい。
その事実を知っているのは苦笑い。

妹にそんな反応をされたためむうと呟く恭也だった。

「さて、着いたぞ」

降りて歩くこと数分。

大きな洋館、月村家宅に着いた面々。

「……………おおきい」

「先に行くぞ」

恭也となのはが先に歩き出し、竜牙と翔が後に続いた。
……………そのとき

——人証登録、未登録。侵入者を排除します——

「……………え？」

「はわわ……………」

「あのバカ……………」

突然の機械音声のあと次々と出てくる銃。

恭也は即座になのはを抱きかかえた。

「俺はこれを止めてくる。壊してもいいからなんとか持たせておいてくれ!!」

その言葉を残して消えると同時に、弾丸の嵐が竜牙と翔に襲い掛かる。

二人とも避けてはいるが、あまりの弾幕に完全には避け切れてはいない。

幸いゴム弾のようだが痛いものは痛い。

「……しょうがない」

竜牙は異空石を二つ取り出し、一つを翔に投げ渡した。

「これは？」

「小太刀だ。この状況ならお前の剣よりこっちのほうがいいだろ。キーは疾閃」

「は、はい」

二人は共に異空石を握り締めてキーを呟いた。

「……疾閃」

「こい、閃月」

「いらつしゃいま「忍!」……どうしましたか？ 恭也様？」

月村家のメイド長であるノエルは主である忍の恋人、恭也の慌てように疑問を抱いた。

「うにゃ……ユーノ君大丈夫？」

「キュ……」

脇に抱えられていたなのはとユーノは少しふらふらになっていた。

「いらつしゃい恭也」

そこへこの月村家の当主、忍が現れた。

「忍……お前また警備システム作っただろ……」

「えっ？ なんで恭也が知っているの？ 恭也達には作動しないようにしてるのに」

「作動してるんだよ！ 連れが……」

そこまで言って恭也は気づいた。

——先ほどまで聞こえていた音が聞こえない。

「……ノエル、システム停止させたか？」

「いいえ、まだ停止させておりませんが」

そのとき、玄関の扉が開いた。

「さすがに疲れましたよ……」

「おう、全部壊しちゃったがいいんだよな」

恭也は若干の小さな打撃跡があるものの、ほとんど無傷で入ってきた二人の姿に驚いた。

「忍……あれ、俺が神速なしで対応できるギリギリだった……？」

システムの性能を聞こうとした恭也は、忍の様子がおかしいことに気づいた。

敵意……というわけではないが明らかに警戒している。

同時に竜牙は忍を、翔はノエルを警戒している感がある。もっともなのは解らず、「はにゃ？」といっているが、ところがその拮抗はすぐに解かれた。

竜牙が警戒を解いたからだ。

「竜牙さん？」

「気にすることはないさ。警戒しているだけであって敵意はないよ
うだからな」

忍の気配とノエルの違和感に警戒していた翔も、竜牙の言葉で警戒を解いた。

不意に竜牙が顎に手を添えた。

（竜牙さん、どうしました？）

ユーノからの念話。

自身から念話を発することができない竜牙達のために決めた合図である。

（こちらの世界のことを話す）

（えっ！？）

突然の話に驚くユーノ。

（あちらさんが何かに気付いたみたいだな。なに、お前の世界のこととは言わないさ）

ユーノの世界のことは秘匿義務があるが、竜牙達の世界では異世界に飛ぶという概念がない。

魔法のを感じられる心配はあったが、似てはいるものの根本的なところは違う。

そのため、ユーノは自身の世界のことを秘密にすることを条件に了承した。

「さて、色々聞きたいことはあるだろうが全部俺が話してやる。それよりもなのはをいかせたほうが良くないか？」

感づいているにもかかわらずここで話さないのに、なのはが絡んでいると思った竜牙はそう切り出す。

「……そうね。ノエル、なのはちゃんをすずかのところに」

「かしこまりました。なのは様、いきますよ」

「ほ、ほえ？ は、はい」

なのははいまだに混乱していたがノエルに着いていった。

「翔、お前も行つて来い」

「えっ？ でも……」

竜牙の突然の言葉に戸惑う翔。

「俺たちを呼ぶことが目的だったみたいだしな。話は俺が聞いとく」

翔は竜牙のその言葉に洪々了承し、ノエルのあとに着いていった。

その光景に再び警戒を強める忍。

もしものがあればさすが達が危険な目に会いかねない。

「大丈夫だ。あいつは正義感が強いだけだからな」

そのことを悟ったかのように竜牙が言い放った。

そしてさらにこう言い放つ。

「さて、何から聞きたい？ 吸血鬼の血を持つ者」

第11話 力と呪い

「な……に？」

恭也は竜牙から発せられた言葉に驚いた。

その事実は夜の一族の関係者だけが知ること。

そのことを知るということは同じ夜の一族に他ならない。

もしくは……月村を狙う者。

自然と小太刀に手が伸びる。

「……恭也。俺は戦いに来たわけじゃない。それにここに来て始めて知ったんだからな」

「そうね。私を見るまで敵意どころか警戒している様子もなかったし」

忍が肯定したことで恭也は小太刀から手を離れた。

そのことを確認してから忍は本題に移る。

「あなたどうして私のことわかったの？ 何者？」

「異世界から迷い込んだ傭兵といったところか。翔も同じだ」

その言葉に驚きつつも怪訝な表情をする二人。

いきなりそんなこと言われても信じられるものでもないだろう。

竜牙もそれをわかっているのか頭を掻いていた。

「ま、信じられないのも解るがな。……これならどうだ？」

次の瞬間、姿が消えた。

恭也が辺りを探すと、玄関にいたはずの竜牙が吹き抜けの二階に立

っていた。

「神速か？」

知覚しきれない速さに馴染みのある恭也は、自身の流派である御神流の奥義かと思っただが……。

「？ 神速とやらは知らんがこれは魔術、瞬光だ。翔もできる」

竜牙は恭也の言葉を否定してその正体を話す。

だが似たようなものを知っているなら証拠にはならないかと、竜牙はあるものを取り出した。

「……石？」

二人にはただ綺麗な石にしか見えない代物。

「ま、異世界の技術といったところか。疾閃」

竜牙の手のひらにあった石。

それが言葉のあとに一つの短剣になっていた。さすがにこれは二人も驚く。

竜牙がその短剣を投げ渡して恭也が確認したが確かに本物だった。

「今ここで証明できることといったらこんなところだ」

「……確かに認めざるを得ないわね」

機械に詳しい忍でも、不思議な出来事に良く会う恭也でも解らない技術。

納得する以外なかった。

「あと広い場所に案内してくれるか？」

「異世界ということはもう認めたけど？」

竜牙の信用していないような発言に睨む忍。
恭也も同じ気持ちらしい。

「いや、そういうわけじゃなくなてな。もう一人……一匹か。紹介しなきゃなんと思うし。……あと俺の力は翔にも秘密なんだな」

意地悪として教えていないわけではない。
ただ翔を心配するからこそ教えていない。
そんな雰囲気は竜牙にあった。

「……そう。それじゃこっちに」

竜牙が案内されたのは食堂。

かなりの広さがあり、呼び出すには十分だろう。

「それじゃ今から呼び出すから攻撃するなよ?」

「待て狩野。何を……」

恭也の言葉が終わらないうちに、部屋の中心が何かを形をとっていく。

人の数倍はあろうかというそのものは、天井ぎりぎりの大きさを姿を現した。

巨大な翼、太い尾、黒く硬質な鱗に覆われた身体。

この世界では伝承だけで実在していないといわれる存在。

「……ドラゴン」

「闇と光の力を持つ竜、アルテルム。俺の守護獣だ」

二人ともまだ警戒していた。

竜を目の前にして警戒するのは最もではある。

そんな光景に苦笑しながら竜牙は続ける。

「まあ月村……だっけか? 気付いたのはこいつらの存在があったから。ゾンビやらケルベロスは普通にいるしヴァンパイアもいたからな」

竜牙は特にダンジョン探索を主にやっていたハンター。

宝を守るガーディアンなど強力な魔獣と多く戦ってきた経験がある。その結果が爆癒や先ほど使った疾閃、閃月などの武器なのではあるが。

「……そして月村が感じた俺の力。アルテルムから受け継いだ呪いが原因だ」

「……呪い?」

竜牙のその不穏な言葉から部屋の雰囲気が一変する。

「ああ、それは……!？」

言葉の途中で話を止めた竜牙を不思議そうに見る二人。
当の本人は月村家の森のほうに目を向けていた。

「ジュエルシード……なのはがいったか」

「なのはがどうかしたのか？」

かなり小声でいったにもかかわらず反応する恭也。
美由希から聞いてはいたが妹バカ……いや、なのはバカといったところか。

「なのはもある事件と関わりを持っていてな」

「!？ 何故止めない!!」

「覚悟を決めていたからな」

その言葉に止まる恭也。

「一度失敗したとき、なのはが落ち込んだときに俺は聞いた。何のために事件に関わるのか。あいつは自分の意思で関わるって言ったよ。誰のためでもなく、自分のためにな」

そついわれては恭也は返す言葉がない。

「気にするな。俺は最良を目指してやるだけだ」

二つの異空石を取り出して血呪、爆癒を出す竜牙。

「続きは後で頼む」

「狩野！！」

飛び出そうとした竜牙を恭也が呼び止めた。

「……なのはを頼む」

「……俺は最良を目指すだけだ。この事件を一番いい方向に向けるためにな」

【お遊び】もしもガンダムの世界だったら（前書き）

なんか唐突に思い付いた。

竜牙と翔が何らかの事情でガンダムの世界へといって、竜牙が独自にガンダムを作ったら……

【お遊び】もしもガンダムの世界だったら

ガンダムムーンノワール

竜牙が開発した竜牙専用のガンダム。

外見はストライクノワールガンダムだが、バックパックのノワールストライカーはつけておらず、胸に白い三日月のデザインが施されている。

本来のストライクノワールはPS装甲によって黒くなっているが、ムーンノワールはただの黒の塗装である。

また数々の武装を装備しており、かなりの重装備だが、すぐに着脱可能な機構になっており、砲撃戦でも近接戦でも対応が可能な機体となっている。

竜牙自身の武器の扱いに長ける点を利用して、Gガンダムのモビルトレースシステムを独自に開発した後、それを搭載している。

さらに通常の動力機関とは別に、魔力を動力とした『魔導機関』をモビルトレースシステムと同様に開発、搭載をしている。

この魔導機関は動力としてのものとは別に、機体能力のブーストの利用方法もある。

ムーンノワールがこの魔導機関を使用するとき、胸の白い三日月のデザインが紅く染まり、竜牙はその状態をブラッドモードと呼んでいる。（意図したものではなく、偶然発生したものらしい）

武装

対装甲刀『血呪&爆癒』

MS用の紅と白銀の二本の刀。

ガンダムアストレイレッドフレームのガーベラ・ストレートとほぼ同様のもので、竜牙の持つ二刀のような特別な能力はない。

腰の左右一本ずつ、武士のようにさして装備している。

ビームダガー

主に近接、中距離用に装備されている投擲用の刀身の短いビームサ―ベル。

腰の後ろに6本装備しているほか、手に隠れるように腕から射出されるような形で、左右一本ずつ装備されている。

ビームライフルショーテ―

本来のストライクノワールに装備されているものと同じ、連射性を重視したビームライフル。

ムーンノワールにも二つ装備されている。

スナイパーライフル

超遠距離の奇襲用装備

これを使用するとき、広範囲の索敵に機体性能のほとんどを回すために、ムーンノワールはほとんど動けない状態になる。

ガトリング砲・ホーミングミサイル・マイクロミサイル

遠距離における、敵が近づいてくるまでの武装。

ホーミングミサイル・マイクロミサイルについてはムーンノワールの装甲の上から、鎧のように外部装甲として装備されている。

実戦ではガンダムWのヘビーアームズのフルオープンアタックのように乱射する。

超大型ビームサーベル『月夜断月』

ムーンノワールに搭載されている最強の決戦兵器。

ガンダム00のダブルオーライザーのライザーソードに近いものであり、コロニー程度なら一撃で両断できる。

ダブルオーライザーではトランザム状態で貯蔵粒子を全て消耗する

が、ムーンノワールはブラッドモードで魔導機関の魔力を全て消耗する。

一応通常の動力機関はまったく影響がないため、使用後も普通に動くことは可能である。（ただし魔導機関は当然使えない）

ガンダムウインググレインド

竜牙が開発した翔専用のガンダム。

外見はガンダムW Endless Waltzのウイングガンダムゼロカスタムだが、翔の守護獣であるブラストのアルティメットモードを参考にしたため翼は6枚であるほか、青の部分が風をイメージした緑である。

また、ウイングガンダムゼロとは違って機動力を特化させた格闘戦を主としている。

その機動力を最大限に高めるために、武装が最低限に抑えられている。

ムーンノワールと同じくモビルトレースシステムと魔導機関を搭載している。

ウインググレインドが魔導機関を使用するとき、緑の部分まで白くなって全身真っ白な姿になる。

このとき機動力が上がるほか、魔導機関の使用による魔力の放出が不可視のシールドとなって、装甲の防御力が格段に向上する。

この姿をセラファイモードと呼び、通常のビームライフル程度ではかすり傷しかつかない。

武装

対装甲刀『歌翼』

MS用の刀。

翔が持つ二枚刃のダブルエッジの刀と同じ名称だが、名称だけでムーンノワールと同じくガーベラ・ストレートとほぼ同様のもの。ただし刀そのものの性能はムーンノワールのものより上。

これはいくつかの遠距離装備を持つムーンノワールとは違って、ウイングレジェンドにはほとんど遠距離装備がないための配慮である。並のモビルスーツの装甲程度ならバターのように切り裂く。

ビームブーメラン『ウイングフェザー』

ウイングレジェンドの唯一の間接武器。

ほとんど牽制用。

シールドウイング

ウイングレジェンドの背にある翼。

6枚の翼すべてが可変式であり、翼で全身を覆うなどして防御する。ただしこの翼は機動力の向上、飛行するときに必要なため、破壊されることに機動力の低下、全てを失うと飛行できなくなる。

【お遊び】もしもガンダムの世界だったら（後書き）

別にこの設定でガンダムのSSを書くとは思ってません。
主観ですがガンダム系のSSは特に難しいように感じますし。

第12話 二人の想い

月村家で渋々竜牙と別れた翔。

内心、竜牙なら大丈夫だと思っではいるのだが。
しかし今、翔はその竜牙をちよつと怨んでいた。

「ねえ、翔さんって……」

「翔さん」

——僕、何かしましたか？

「にやはは……」

なのはの苦笑が空しく響いた。

アリサとすずかの話では、以前に二人に会って興味が沸いたから呼んだらしい。

なのはの表情を見る限り、どういう頼み方をしたのかいささか気になる翔ではあったが……。

そんなこんなで根掘り葉掘り聞かれていた。

最初は遠慮していたのはも、多少は気になるようで途中から参加していたりしたが。

翔は異世界のこと、魔法、魔術のことをなるべく隠して、出来る限り話した。

「ちょっとおトイレいつてくるね」

なのはが部屋を抜け出したのはそんなときだった。

「ねえ翔さん……」

先ほどから聞かれ続けた事。

だがアリサのその言葉が、今までの好奇心からでの言葉ではないのに翔は気付いた。

「最近なのはに変わった出来事なかった？」

「……どうしてそう思うの？」

的確すぎるその問いに面をくらいながらも、平静を装ってそう答えた。

「最近なのは、ぼーっとしてる事が多くて」

「ちょうどユーノ君を見つけてからかな。何か大事なことみたいなんだけど……」

よく見てる。

翔はそう思った。

自分なのはに出会ってからそんなに時間は経ってないが、あの大樹のジュエルシードのあとどこか変わった気がする。

それを見ていないはずなのにわかんということは、かなり信じあっ

ているということ。

（僕とブラストみたいだね）

（……うるさい）

信頼の絆で結ばれている翔とブラストもが認める仲。

「……なのはいい友達を持ってるんだね」

翔は嬉しく思った。

なのはにもこれだけ心配してくれている仲間がいることを。

「そうだね。たしかになのはある出来事に関わっている」

だからこそこの二人を信じて話すことにした。

「それって……!!」

「僕が言えるのはそこまで」

だけどそれ以上はなのはが言うべきこと。

「なのはが自分で決めたことだからね。なのは自身が言わないと意味がないから」

「そう……ですか」

二人の落胆した声。

「でもいつか必ず、なのはは二人に話すと思うから。それまで待っていてくれないかな？」

「わ、わかったわよ……」

「……はい」

その素直な返答に二人の頭をなでる翔。
恥ずかしいのか二人とも顔を赤くして俯く。

そんな大事な話をしていたとき、ユーノは猫に追いかけて伸びていた。

「ただいま……どうしたの？」

それはなのはが戻ってくるまで続いていた。

ジュエルシードが発動したのはその後、庭に移動した後。

（なのは！ 翔さん！）

（うんっ）

（ジュエルシード……）

だがアリサとすずかの前ということもあり、きっかけがつかめない。
どうしようかとなのはとユーノが迷っていたとき。

（……ユーノは先に森のほうへいつてきて。それをなのはが追えば理由は付く）

翔がそう提案した。

だがそれに翔が入っていないことに気付いたなのは聞いた。

（翔さんは？）

（僕は待機しているよ）

こっちも無視するわけにいかないからねと翔。

（けどまずいことになりそうだったらすぐ念話で呼ぶことに駆けつけるから）

（わかりましたっ）

ユーノが飛び出しておとりになる。

「ユーノ君？」

「ユーノがどうしたの？」

「うん。何か見つけたみたいで。ちょっといつてくるね」
「一緒にいこうか？」

すずかのその言葉に戸惑ったなのはだが翔がサポートする。

「大丈夫だよ。遅くなるようだったら俺がいくから」
「うん。それじゃいつてくるね」

そうしてジュエルシードの反応を追って、たどり着いたのは庭の森の中。

そこで二人が見たものは……。

「ふえ……」

「……え」

生えている木より大きな猫がそこにいたのだった。

第13話 二人の魔法少女（前書き）

色々忙しくて遅くなりました（汗）

バイトやってほかの小説見てモンハンやってポケモンやって……時間足りねえよ（苦笑）

おわびとして新規連載を亀更新になりますが、今日中に一つ上げようと思います。

第13話 二人の魔法少女

ジュエルシードの影響により巨大化した小（？）猫。

ジュエルシードの影響を受けたにしては暴れる様子もなく、地響きを鳴らしながら歩いていく。

そのことに対してユーノの見解は……。

「た、多分……あの猫の大きくなりたいていう願いが正しく叶えられたんじゃないかな」

とのこと。

正直なところ、なのはもそう意味じゃないんだと思うけども思っている。

「だ、だけどこのままじゃ危険だから元に戻さない」と

「そ、そうだね。さすがにあのサイズだと、すずかちゃんも困っちゃうだろうし」

そういう問題でもないと思うのだが……なのはも混乱しているようである。

襲ってくる様子もないため、穏便に封印しようとレイジングハートを取り出した……そのときだった。

「にゃあ!？」

なのはの後方から黄色の何かが飛んできて、小猫に衝突した。

「なっ!？」

なのははすぐに黄色の何かが飛んできた方向を見た。
そこにいたのは、電柱の先に乗った黒のマントを纏った金色の髪の少女。

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃」

Photon Lancer・Full Auto Fire・

彼女の言葉と機械音声が聞こえた後、彼女の持つ黒い斧のようなものの、デバイスの先から黄色の魔力が収束。
そして魔力弾が無数に発射され、小猫に直撃した。

「っ！ レイジングハート！！」

その状況を呆然と見ていたなのはだったが、小猫の痛みを耐える顔を見て、レイジングハートを起動。

そして飛行魔法、フライアーフィンを発動させて小猫の背の上へ。
そこで振り向いた。

目の前には金色の髪の少女が追撃として放った魔力弾。

Wide Area Protection・

それをなのはが展開した広域シールド、ワイドエリアプロテクションが防いだ。

「魔導師？」

そこで初めてなのはに存在に気付いた少女。
そして再び魔力弾を放つ。

ただし今度は小猫の足元に向かって。

ワイドエリアプロテクションの範囲外であつたため、地面へと着弾。驚いた小猫はバランスを崩し、横倒しに倒れる。

「わ、わわっ!？」

当然、背に乗っていたなのはもバランスを崩すが、即座にフライアイフィンを展開して地面へと降り立つ。

少女のほうも近くの木に飛び移り、二人の少女は対峙する。

「同系の魔導師……ロストロギアの探索者が」

少女がなのはを見てそう言う。

なのはには何のことかわからなかったが、自分のことを言われているだけはわかった。

「ロストロギア、ジュエルシールド」

Scythe Form・Setup・

彼女の持つデバイス、バルディッシュがその機械音声の後形態を変化させて、魔力が刃を模る。

その形はまるで死神の持つ鎌のよう。

「もうしわけないけど、いただいでいきます」

その言葉を合図に彼女はバルディッシュを構えつつ、なのはとの距離を一気に縮める。

Evasion・Flier Fin・

即座に危機を察したレイジングハートが、回避のためにフライアーフィンを展開。

少女が足刈りの如く振り抜いた一撃を、上空へと飛ぶことで回避した。

少しの間、上空で待機するなのはを見ていた少女だったが、その場で再びバルディッシュを構える。

Arc Saber .

そして少女はバルディッシュを振り抜く。

すると魔力刃がなのはへと向かって飛来した。

「っ!？」

P r o t e c t i o n .

なのはは驚くも、レイジングハートが防御魔法であるプロテクションを発動。

魔力刃が衝突し、なのはを中心に爆発が起こる。

「なのは!！」

ユーノが思わず声を上げるが、なのはは爆発の中からさらに上空へと抜け出した。

しかしそこへなのはの行動を予期していた少女が、デバイスを縦に振って攻撃。

ギリギリでなのはが反応してレイジングハートで防御。

デバイス同士の競り合いへと持ち込んだ。

「なんで……なんで急に、こんな……」

なのはは少女に問いかけるが、少女の表情は変わらない。

「答えても……多分意味がない」

どこか諦めているようにも聞こえるその言葉。

「くっ」

二人は互いに相手へと力を加えて、反動で距離をとった。

少女は木の枝の上、なのはは未だ倒れている小猫の傍に陣取った。

そしてそれぞれバルディッシュを元の斧の形状、デバイスフォームに、レイジングハートをシューティングモードへと切り替える。

D i v i n e B u s t e r , S t a n d B y .

P h o t o n L a n c e r , G e t S e t .

そして二人は互いのデバイスを向け合い、射撃魔法を待機させる。
しばらく見つめ合う二人。

そこへ倒れていた小猫が動き出した。

なのはは小猫の無事を確認するために、小猫のほうを向く。

——向いてしまった。

その隙を少女が見逃すはずもない。
待機させていた射撃魔法をチャージさせていき……。

「じめんね」

F i r e .

なのは気付いたときにはもう遅かった。
目前まで迫る黄色の魔力弾。
防御も、ましてや回避をする暇もなく。

「なのは!!」

空へと打ち上げられた。

頭から落ちていくなのは。
それをユーノが、地面に落ちる前に魔法でゆっくりと降ろす。
だがユーノにできるのはそこまで。
未だ魔力が完全ではないユーノでは、少女がジュエルシードを封印
することを止めるすべはなかった。

S e a l i n g F o r m . S e t u p .

「捕獲!!」

形状が変わったバルディッシュから地を這う雷撃が発生し、小猫を襲う。

しばらくそのまま続けと、ジュエルシードが小猫の体から離れた。

そしてシリアルナンバーである??の刻印が刻まれる。

「ロストロギア、ジュエルシードシリアル14……封印」

バルディッシュの先から天に向かって雷撃が放たれる。

すると空の一部が暗くなり、無数の魔力弾が地へと落ちていく。

それは小猫を囲むようにして円を模った。

そして本命の封印、光の柱が小猫を包む。

光が晴れたそこには、元の大きさへと戻った小猫とジュエルシードがそこにあった。

少女がジュエルシードに近づく……そのときだった。

「——それをどうするつもり？」

突然のその声。

少女はその言葉に、手を伸ばしかけていた手を引いて声のするほうを見た。

そこにいたのは刀を持った銀髪の青年。

「翔さん!!」

帆風翔、今降臨。

第14話 実力の違い（前書き）

2011/1/9 タイトルがなかったのを追加

第14話 実力の違い

「——それをどうするつもり？」

ユーノから念話での緊急事態を受けて、すぐに森の中へと向かっていた翔。

しかしそれは一歩遅かった。

天を貫く一条の光。

そして消えた後には一人の少女と、封印されたジュエルシード。そして倒れているなのはの姿。

その光景を見て、翔は内心自分に対して舌打ちをした。間に合わなかった、と思いながら。

だが幸い、なのはには傷は見当たらない。

なればこそ、翔は金色の少女に向かって問い質したのだった。

「答えても……意味がない」

対する少女の答えは否定。

バルディッシュを翔へと向けて敵対の意思を表す。

そして……。

「フォトンランサー……」

Fire.

雷の魔力弾、フォトンランサーを発射した。

少女は一つ、ミスを犯した。

それは翔の實力を見誤ったこと。

少女は翔からほとんど魔力を感じなかったことにより、それほど實力は高くないと判断したのである。

確かに普段の翔からは、念話で受ける程度の魔力しか感じられない。だがそれは、翔自身はまったく魔力を持たず、守護獣であるブラストの魔力を借りているに過ぎない。

そして人の精神に存在している守護獣の魔力は、他の人物にはまったく感じられないようなのである。

故に少女が感じたのは、竜牙から言われていた念話の受信用に、常時展開させている微弱な魔力のみ。

だからこそ少女は見誤った。

目の前の青年が相当の實力者だということに……。

「疾風」

その一言と共に常人を軽く超えるスピードで、それも最低限の動きで魔力弾を回避。

疾風とは、翔の扱う風属性の魔術の一つ。

効果は移動速度の強化と、かなり地味な部類に入るが、少女の反応は違う。

「魔法！？ バルディシュ！！」

Photon Lancer.

翔が言葉を放つ一瞬、魔力が跳ね上がったのだ。
それでも少女自身の魔力には遠く及ばないのだが、魔力が跳ね上がった事実に対しては警戒が必要と判断。
先ほどより数を多くしてフォトンランサーを放つ。

「無駄だよ」

しかし翔はそのフォトンランサーを空を跳んで回避。
そして……。

「ウィンドリム」

風の亜種属性、翼の魔術、ウィンドリムを発動し、背に風の翼を従えて宙に制止した。

一連の動作は明らかに戦い慣れしているもの。
それは少女にも簡単にわかった。

「話を聞かせてくれないかな？ 君は誰で、何でこんなことをしているのか」

故に少女は翔に対する評価を改める。

少なくとも、自分とまともに戦える相手へと。

「バルディッシュ」

Scythe Form .

——だがそれですらまだ甘い。

「仕方ない……か」

Blitz Action .

少女はブリッツアクションを使う。

短距離限定だが、普通ならば見失うほどのスピードで移動する魔法。それによって翔の背後に回り、攻撃するためにバルディッシュを振りかぶる。

——少女が見たのは自分のほうに向けられている手のひら。

「エアブラスト」

「えっ？ きゃあああ!？」

そこから放たれるのは人をも吹き飛ばす突風。

翔が手のひらから発動させた風属性の魔術、エアブラストによって少女は吹き飛ばされる。

錐揉みしながら吹き飛ばされていた少女は、再び飛行魔法を使用して制動をかける。

そして対峙する二人。

「そっちがその気なら……気絶させてでも聞かせてもらっ」

翔はそう言って今まで鞘に収めていた刀、歌翼を抜き放つ。

「翔刃暴風流が——……」

「っ！ アークセ……!？」

言葉では翔が先、だが行動は少女のほうが先……。しかし少女の行動は途中で止まることとなった。

（消えっ！！？）

そう、確かに捉えていたはずの翔の姿を一瞬で見失ったのである。高速戦闘を得意としているはずの彼女が。そして少女の疑問の答えはすぐに解る事になる。

「——閃光一閃」

「っかは……」

少女の敗北によって……。

薄れゆく意識の中、彼女が思い浮かべたのは自身が愛する者の姿。

「かあ……さ……」

そのとき、自分が誰かに抱えられたのがわかった。目を向けると一人の男が自分を抱えていた。

しかしその顔を認識することなく、少女は意識を失うのだった。

「どうしてなんですか？」

少女に対して行った翔の攻撃は峰打ち。

彼女に大きな傷を与えるつもりはなかったからだ。

そして今、翔は少女を抱える一人の男と対峙していた。

黒のバンダナを頭に巻いたその男。

その男を翔はよく知っていた。

「どうして、その子を助けようとするんですか？ 竜牙さん」

狩野竜牙、介入。

第14話 実力の違い（後書き）

翔が少し暴力的ですが、これには一応理由があります。
その辺は次回に持ち越しで。

第15話 竜牙の思惑と翔の信念（前書き）

2011/04/03 改行ミス修正

第15話 竜牙の思惑と翔の信念

「んう……？」

少女は目を覚まし、辺りを見渡す。

それで自分が海沿いの公園にいることに気付いたが、何故自分がこんな所にいるのかしばらく分からなかった。

だが時間をしばらく置くと、それまで何が起きていたか思い出し……。

「……っ！？ ジュエルシード!!」

自分が銀髪の青年にやられたことを思い出した少女は飛び起きた。

「よう、起きたか？」

そこへ少女の後ろから、声をかける者がいた。

少女が振り向くとそこにいたのは、何かが入った茶色の紙袋を持つ黒のバンダナの男。

「あなたは確か……」

少女はその男を知っていた。

数日前、道に迷って声をかけてきた人。

「久しぶりだな。フェイト・テストロッサ」

狩野竜牙その人だった。

時間は翔と竜牙が森の中で対峙した時まで遡る……。

「どうして、その子を助けようとするんですか？ 竜牙さん」

フェイトを抱えた竜牙を睨む翔。

そんな様子に竜牙はため息を吐いた。

「お前……自分が絶対に正しいと思うか？」

突然の竜牙のその言葉。

翔は意味が分からず首を傾げる。

「まあこつち側からすれば正しいな。あくまでジュエルシードはユニノが見つけ

たもの。それを奪おうとし、なのはを傷付けたこいつは確かに悪い」
「それが何を……」

竜牙の言葉に内心頷きながらも、何故ここでそれを言う必要があるのか分からない翔。

「だが考えてもみる翔。何故こいつはお前と戦ってまでジュエルシードを欲しがる？ 猫が巨大化するという現象までみている以上、ただの代物じゃないのは明白なのに」

「それは……」

だが続けられた言葉で戸惑った。

猫が巨大化するというのは確かにありえない状況であり、場合によっては危険すらありえる。

その原因と言うべきジュエルシードを、なのはと同じくらいの歳の少女が取りに来たというのは、あまりにも不自然。

「それにな、こいつ気を失う前に『かあさ』と呟いたぞ」

続く言葉は『ん』だというのは、翔にも容易に想像できた。

「まさか……」

「まあお前が思っている通りだと思うけどな」

つまりは母親に言われて、ジュエルシードを探しに来たことになる。

「翔、俺はこいつの側につく」

少女を見つめながら、竜牙は宣言する。

「なのはちゃんの側を離れるんですか？」

「お前がいれば大丈夫だろう。それよりもこいつの母親が、何を考えているのか知りたい」

わざわざ集めさせるようなことである。

ジュエルシードの危険性を解っていないながら集めさせているのだろう。ならば竜牙は余計に知りたい。

そこまでする理由は何か？

そして何故この少女、フェイトに危険なことをさせるのか……。

「ともかく俺はコイツを連れて別の場所にいく。月村の家にとってすれば侵入者だからな」

あと、フェイトがなのはを傷付けたことにより、恭也が何らかの行動を起こすかもしれないと、竜牙は内心危惧していたりする。

なのはと同年代のフェイトには、いくらなんでもいきなり攻撃はしないと思っているのだが、念には念を入れて。

「翔は恭也と忍に説明を頼む。無論、魔法のことは伏せてな」

「いいんですか？ 本当に……」

翔はある程度、人の本質を見抜く力を持っている。

力としては弱いが、純粋な人ではない存在というのは解るのだ。

そのため、吸血鬼との混血とはわからないものの、月村忍が純粋な人でないことはわかっている。

「大丈夫だ。こちらから敵対しない限りあつちから攻撃することはないさ。アルテルムも見せたしな」

「……また何で？ 魔術の一つでもやれば……」

「瞬光をやったが近いものを知っているらしくてな」

その言葉に翔は驚く。

なのはが特殊であり、魔法すら存在しないと言われる世界なのに、人の知覚外のスピードで移動する魔術である瞬光を、似たものでありながらも知っているというのである。

「どこで知ったんですかね？」

「俺が知るか。あとで恭也にでも聞いておけ」

後日知ったことだがまさか竜牙も、その恭也自身がその技を体得しているとは思っても見なかった。

「……ああそうだ」

そろそろ去ろうとした竜牙だったが、あることを思い付いて翔と向かい合う。

「翔、お前の信念は『守る』ことだったな」

「はい。この手で、できる限りの人を守ること」

それが、翔が今まで生きた中で決めたこと。

「その中にコイツも含められないか？」

お前の境遇なら気にするのはわかるけどなと、フェイトを見ながらそっぴい竜牙。

事実、翔は元の世界で一般的に悪といわれる相手を幾度も戦ってきた。

信仰故に一人の少女を殺そうとした集団、世界を滅ぼしかけた闇の力を持つ炎竜、そして時空を渡り、長き時の末具現化した怨念。

本来の竜牙の世界に語り継がれる英雄、シヨウのもしも、IFの存在に違わない経験を持つ。

しかし、明確に敵と判別できるものばかりを相手にしてきたため、敵となった相手を救う必要がなかった。

故に、なのはを傷付けたフェイトに対しての攻撃が強烈だったのである。

敵を倒すことしか知らず、敵を救うことを知らなかったがために。

「少し……考えておけ」

そうして竜牙は翔のもとを去るのだった。

「守る……か」

翔はしばらくの間、自分の信念について考えるのだった。

ちなみになのはを落下から救ったユーノであつたが……。

「キユ」……」

翔に対してフェイトが放ったプラズマランサーの流れ弾を受けて伸びていた。

そのことに翔が気づいたのは、なのはを月村家へと送った後だったという。

合掌。

第16話 陰謀潜む再会（前書き）

1話がだんだんと短くなっていくのが気になる……（汗）

第16話 陰謀潜む再会

「あなたは確か……」

「久しぶりだな。フェイト・テストロッサ」

公園にて向かい合う二人。

フェイトが何故この人がいるの、と疑問に思うのは当然。
自身は銀髪の青年にやられて気絶していたのだから。

「まあ災難だったな。翔と戦うなんて」

「翔……？」

だからこそ彼女の反応は必然。

「ああ、あの銀髪の奴の名前だ」

「っ！？」

それを聞いたフェイトは即座に飛び退く。

名前を知っているということは最低でも知り合い、彼女にとって最悪ならば自分を倒した奴の仲間なのだから。

「……まあ警戒するのはわかるけどな。少なくとも戦いにきたわけじゃないぞ」

じやなきや起きるまで待つていないだろうと、フェイトに対して同意を求める竜牙だったが、フェイトは警戒を緩めない。

竜牙はそのフェイトの様子にため息を吐くと、上着のポケットをゴソゴソと探り出す。

そして何かを取り出した。

「それじゃコレをやるって言ったら？」

青く輝くひし形の宝石。

「ジュエルシード!？」

竜牙はそのままフェイトに向かって、ジュエルシードを放り投げた。それをフェイトが慌てながらも、しっかりと掴む。その手の中には紛れもない、本物のジュエルシード。

「これで話を聞く気になったか？」

「……少しなら」

「……これは？」

フェイトの手には竜牙が持っていた、茶色の紙袋から取り出したも

の。

「なんだ？　たい焼きも知らないのか？」

魚の鯛の形をしたお菓子、たい焼きである。

何故かはわからないが竜牙の世界にもたい焼きは存在しており、以前見つけて興味本位で買ったところ、まったく同じ味で気に入っているのだった。

「たい焼き？」

「まああんこが入ったお菓子だな」

そう説明しながら頭からかぶりつく竜牙。

それを見てフェイトは小さく口を開けて、たい焼きを一口。

「……おいしい」

呟くフェイトは小さく微笑んでいた。

「さて、そろそろ話すでしょうか」

三口でたい焼き一つを食べ終えた竜牙は、自身のことを話し始める。

自分が異世界の人間であること。

フェイトが戦った白い魔導師、なのはの家に世話になっていること。
そして……。

「お前が戦って負けた銀髪の奴、翔は俺の弟子の一人だ」

「っ!？」

フェイトは目を見開く。

自分が一方的にやられた相手。

それが目の前の人物、竜牙の弟子だとすると、師である竜牙はそれ以上。

そんな人が相手に二人もいるとなると、ジュエルシード集めは絶望的。

「そこで提案だ」

竜牙はフェイトにとって意外なことを言い出す。

「俺が翔の足止めをしてやる」

「……えっ？」

ポカンと口を開きながら呆然とするフェイト。

その反応は当然のことで、竜牙は仲間の邪魔をすると言っているようなものなのだから。

「そうすればもしぶつかり合っても戦うのはなのはだけ。そうすればあとは……」

「ちょ、ちよつと待って」

そのまま話を続ける竜牙だったが、フェイトに止められる。そうして止めたフェイトは当然の疑問を竜牙に聞いた。

「なんでそこまでするの？」

「余計なお世話だったか？」

竜牙の答えに首を横に振るフェイト。

余計なことはない。

ジュエルシードを集めなければいけない以上、どうにかして青年は出し抜かなくてはいけない。

それには彼の提案はもつとも魅力的。

だが彼には理由がない。

自分を助けるだけの理由が……。

「そうだな……。しいていうなら……」

そんなフェイトの内心を読んだかのように、竜牙は口を開く。

「お前が気に入ったから。それじゃダメか？」

「えっ……」

フェイトの顔が赤く染まる。

状況が状況だったせいで、竜牙を警戒していたものの、実際は一目惚れした相手。

そんな事を言われて、嬉しくないはずはなかった。

「ま、それは実際に次になのはと戦うときになったら確かめて貰えばいいさ。すぐには信じられないだろうしな」

「あっ……」

そのままじゃ、と去る竜牙に呼び止めようとするフェイトだったが、その暇もなく竜牙はフェイトの視界から消えた。

「狩野竜牙……」

そしてしばらくの間、フェイトは竜牙が去った方向を見ながら立ち尽くすのだった。

【1万アクセス記念】とあるレベル0の無限転生者 予告編（前書き）

1万アクセスありがとうございます。

これから1万アクセスごとに、竜牙の無限転生シリーズの予告編を公開しようと思います。

初回は現在公開中のある魔術の禁書目録&とある科学の超電磁砲から。

【1万アクセス記念】とあるレベル0の無限転生者 予告編

数々の世界を生きてきた竜牙。

次に訪れた世界は科学による超能力と魔術が混ざり合う世界。

そこで彼は再び、運命の出会いを果たす。

「何やってんだ？ 失敗なんぞらしくねえぞビリビリ」

「あんた……とりあえず礼を言っておくわ」

「何の能力も持たない自分が……力を求めたのがいけなかったんですか？」

「力を求めるのは誰にでもあることだ。……かつての俺のようにな」

「やっとわかったよ……歩く教会が誰に壊されたのかを……」

「ったく……人が寝てるっていうのに何の騒ぎだよ……」

「はあっ!!!?!?」

「見せてやるっビリビリ。これが俺の……本当の力だ」

「なっ!!!?!?」

「なあ……俺がやったことは偽善なのかな？」

「そうだな。だが……前のお前も同じだったよ」

「お前には素質がある。この学園都市の能力とは別の力が。それでも求めるか？」

「わ、私は……」

「愕然。何故効かぬ!？」

「悪いな。その手の攻撃は効かねえんだ」

「何だよ！？ 何で人が死んでいるのにそんな平気にしていられるんだよ！？」

「人の死など既に慣れてる。それに自身のことを蔑ろにしている奴を助けようとは思わないんだよ」

「よう。勝てねエ戦はしないンじゃなかったのか？」

「そうだな。確かに俺じゃ勝てねえ。だがもう一人のレベル0が
前を倒すのさ」

彼は再び、戦に赴く。

【1万アクセス記念】とあるレベル0の無限転生者 予告編（後書き）

既にいくつか公開していることから、今後出す可能性のあるセリフを抜粋することになりました。

ここで出したのはシスターズ事件まで。

次回はF a t eで。

第17話 海鳴温泉にて（前書き）

2011/04/04 改行ミス修正

第17話 海鳴温泉にて

「それで、お前は近いうちに離れるわけか」

「ああ、世話になっていたのに悪いけどな」

竜牙が恭也に今後の予定を説明していた。

魔導師としてのフェイトと会ってから数日、ジュエルシードは発動せず、今までと比較すると平穏な日々が続いている。

「しかし本当なのか？　なのはもそうだが、なのはと同年くらいの子が危険な物を集めているというのは……」

「少なくともその裏に何者かが絡んでいるのは確かだ」

魔法のことは詳しく話せないので、なのはにはその危険な物を封じる力を持つことだけは、翔が恭也に話していた。

かなり無理な話ではあるが、なのは自身が決意したことであるため、渋々認めた恭也である。

「まあまあ、これから先はそういう話は抜きつてことで」

運転していた忍が明るくそう言う。

どこで話しているかというと、実は車の中。

高町家が飲食店ということもあり、大型連休を外しての休日に高町、月村、バニングスの三家による合同旅行となっているのである。

「向かっているのは温泉……でしたっけ？」

「そうだよ。あなた達の世界にはないの？」

「いや、あるにはある。だがほとんど数がなかったはずだから、知っているのはほんの僅かだったはず」

その世界の各地を飛び回っていた竜牙ですら、実際に入ったことがあるのは二箇所のみ。

人里を離れると、いつ襲われるかわからない世界だったが故に、例えあったとしてもそこまで有名にはならなかっただろうと竜牙は推測する。

「そっか。結構気持ちいいから楽しみにしているといいよ」

「あ、はい」

「……ん？」

その忍に対する翔の返事が、やけに上の空のように感じた竜牙。そしてすぐに気付いた。

翔が自分の言った言葉に悩んでいることに……。

翔の信念である『守る』中に、フェイトも含められないかという言葉葉を……。

「あんまり気にするな」

「りゅ、竜牙さん？」

突然竜牙に、頭に手を置かれた翔は少し疑問顔。

「深く考えるな。お前はお前なりの答えを出せばいい。焦らずとも時間はある」

それだけ言うと、竜牙は翔の髪をぐしゃぐしゃと撫で回して笑う。それに対して翔は少し呆然としたあと、笑みを浮かべた。

それを見た恭也と忍は、まるで兄弟のようだと思っただった。

「ふう……。やっぱり気持ちいい」

「そうですね……」

時間は過ぎて目的地に着いた一行。

竜牙と翔は荷物の整理が終わると、早速温泉に浸かっていた。

竜牙は頭にタオルをのせて目を閉じているし、翔に至っては初めての温泉に垂れきっていた。

「それにしてもよかったですか？」

「ん？ 何がだ？」

「ほら、ユーノ君のこと」

翔にそう言われて思い返すのは、先ほど男湯、女湯で別れたなのは達とのこと。

やけにユーノが男湯のほうに来たそうにしていたけれど、アリサに捕まって連れていかれたが……。

「別にいいんじゃないか？ 人の言葉を話すと言っても動物だし」

そういえば温泉って動物入れてよかったのかと、若干的外れなことを考える竜牙。

しかし次の翔の言葉で驚くことになる。

「……ユーノ君、人間ですよ？」

「……はあ？」

あまりの事実の驚きを隠せない竜牙。

「確かに姿形はこの世界で言うフェレットなんですけど、僕が『視る』と人間のものと一致するんです」

『視る』とは、翔の持つ本質を見抜く力のこと。

ということはユーノは魔法なり、何らかの方法でフェレットに変身した人間ということになる。

「そうするとあの反応は、どうにかして連れていかれないように逃げようとしていたわけか……」

「やっぱり助けてあげたほうがよかったかな？」

「ま、いいんじゃないか？ 話を聞いている感じだとなのは達と同年代っぽいし。役得役得」

考え方は子供っぽくないが、と思いながら気楽に答える竜牙。

「だが……」

「なんですか？」

しかしすぐに顔をしかめる。

その理由を翔が問うと……。

「恭也にバレたらヤバいことになりそうだと思ってな……」

「ああ……」

二人が思い出すのは先日のこと。

魔術である瞬光を見てもあまり驚かなかった理由を、恭也に聞いたときのことである。

実際にその目で見たのだ。

瞬光に僅かに劣るものの、通常では知覚できない速さで動き、さら

には瞬光では

出来ない加速中での様々な行動を可能にする御神流奥義、神速を。
脚に相当な負担がかかるらしく、乱発こそ出来ないものの、性能は
瞬光より遥かに上。

そんなものを魔術も魔法もなく、使える恭也に驚いたのは当然のこと。

そんなことができるシスコン（なのは限定）の恭也が、ユーノが実は人間だと知ったら……。

「南無……」

「竜牙さん……」

竜牙の行動に苦笑しながらも、冗談じゃすまないかもと思ってしま
う翔であった。

長々と温泉に入っていた二人。
少しのぼせ気味ながらも、泊まる部屋に向かっていた。

「さうて、もうひとつぶろいってこよつと」

そんな声が聞こえてきたのはそんなときである。

二人は特に気にしていなかったが、ちょうど曲がり角で竜牙が人とぶつかりそうになった。

「おっと」

「おっ」

それを両者共に踏みとどまって衝突を回避。

そこで双方がお互いの顔を見た。

竜牙にぶつかりそうになったのは、オレンジ色の髪をした女。

「久し……」

「悪かった」

女の声を遮って謝罪する竜牙。

そしてそのまますれ違い、少し先をいていた翔に追いつく。

「……何か言つてませんでしたか？」

「何のことだ？」

翔の問いにしらばつくれる竜牙。

だが確かに翔の言うとおり、すれ違い様にあることを言っていたのである。

竜牙とすれ違ったオレンジ色の髪の女、アルフは温泉に浸かりながら竜牙の言った言葉を復唱していた。

「二時間後に一人でこの旅館にある池の畔へ……か」

第18話 温泉と暗躍とお酒（前書き）

アルコールは二十歳になってから飲みましょう。
作者は18歳で飲みましたが（おい

第18話 温泉と暗躍とお酒

「……ここだね」

アルフは竜牙に言われた通り、池の畔へときていた。

フェイトには竜牙、そして自分達と敵対する白い魔導師と銀髪の青年がいることしか伝えていない。

アルフ自身はまだしも、フェイトは竜牙のことを信頼し始めているからだ。

アルフの考えはあくまでもフェイトが最優先。

そのフェイトが悲しむ顔は見たいはずもなく、竜牙に注意するようになどと言えば、否定はしないものの、悲しむのは簡単に想像がつく。

故にフェイトに知られないまま、竜牙の真意を知るために、あえて言われた通り一人で来たのである。

「よう。言ったとおり一人で来たな」

そんなアルフの前に竜牙が現れた。

浴衣にもかかわらず、頭に黒バンダナを着けているのは些か妙ではあるが。

「ああ。フェイトに妙なこと吹き込まれるのも嫌なんでね」

いくらフェイトを助け、ジュエルシードまで渡した竜牙でも警戒は解かない。

今回のように話すのも、その件がなければ本来はしなかったこと。

「それで私に何の用だい？」

「ああ、少し聞きたい事があってな」

竜牙は本題に入る。

フェイトではない、アルフにだから聞けることを……。

「あいつの母親っていうのはどんな奴なんだ？」

次の瞬間、その場の空気が変わった。

アルフが苛立ちを隠さず、目は瞳孔が開き、怒気が身体から溢れている。

それを見て竜牙は予想通りと感じていた。

フェイトが翔にやられた状況で、意識を失う前に呟くくらいだから、フェイトはその母親のことをかなり信頼しているのがわかる。

だがそれでも自分からジュエルシードを探しに、わざわざ管理外世界にまでくるだろうか？

確かにジュエルシードの願いを叶えるという特性から、フェイト自身が欲する理由もないとは言えない。

しかしいくら魔導師とはいえ、ジュエルシードを輸送していた輸送艦が事故を起こし、管理外世界である地球へと落ちることなど予想出来るはずがない。

一応フェイトが輸送艦を襲撃した可能性もあるものの、少し話しただけではあるが、竜牙にはそんなことをするようには思えなかった。だとすれば第三者の指示に従っていることになり、ロストロギアが危険性が高いものが多いこと、それにもかかわらず従うということは、それなりにフェイト自身が信頼していることが考えられたのである。

しかしフェイトと共にいるアルフの様子を見ると、フェイトの信頼は一方的なものようだ。

「どんな奴もなにも酷いよあのババアは!!」

「……そこまでか?」

アルフの凄まじい剣幕に、さすがに予想外であつた竜牙はそんなことを聞く。

その問いをきっかけにアルフは、今までの鬱憤を晴らすかのように怒鳴り散らし始めた。

「そうだよ!! 何の研究かは知らないけど毎日毎日研究室に籠もりつきりでフェイトとは顔も合わせようとは思えない!! おまけに久しぶりに顔を見せたかと思えばこの世界に散らばつたジュエルシードを回収しろだって!? 冗談じゃないよ!!」

そんなアルフの言葉に竜牙は一つ、疑問が浮かんだ。

「なんでそんな母親なのに、フェイトは気を失う寸前に呟くほど信頼しているんだ?」

その問いにアルフは怒っていたその表情を歪ませて、悲しげな表情に変わる。

「フェイトがさ、言うんだよ……母さんは研究がうまくいかなくて焦っているだけだって……。それさえうまくいけば元の優しい母さんに戻ってくれるってさ。あたしにはそうなるとは全く思えないけどね」

竜牙はアルフの話を聞いて、再度考え込む。

フェイトの母親がフェイトにジュエルシードの回収を指示したのは確定。

研究ということから、その特性もある程度知っていることだろう。

だが一つ疑問が残る。

フェイトの話す昔の母親と、アルフがここまで激怒する今の母親とがどうしても繋がらない。

少なくともそれだけ印象が変わるほどの事件があったはずなのだ。まだ、情報が不足している……。

「よし、わかった」

竜牙は元々予定していた策で進めることにした。

全ては一連の出来事が誰の不幸もなく終わらせるために……。

「何がわかったんだい？」

「これからの予定だ。アルフがいるということはここにジュエルシードがあるということだろう？ 俺は約束通り、翔を足止めしてそちらにいかないようにする。それで信用できるとそっちが判断したら……」

竜牙は策略を講じ始めるのだった。

時間は過ぎて夜。

ジュエルシードの反応を感知したなのはとユーノは、既に封印を終えたフェイトとアルフと対峙していた。

（竜牙さん翔さん、ジュエルシードです!! あの子もいます!!）

ユーノが二人に念話を送るが、なかなか返事が返ってこない。

（ご、ごめんユーノ君……）

しばらくの後にようやく翔から返事が返ってきた。
しかし様子がおかしい。

（すまんなユーノ）

続けて竜牙からの返事。

そのあとに続く言葉にユーノは驚くことになる。

（大人達の飲み会に付き合わされて翔がダウン。俺も抜けられそうにない）

「何やってるんですか!？」

思わず念話だけでなく、実際に口に出してしまうユーノ。
突然の叫びに傍にいたなのはともかく、フェイトとアルフまで驚いてしまった。

（うつぷ……は、吐きそう……）

「わー！？ 念話を通してはいえ吐かないでくださいよ!？」

（うめゝなこの酒）

「竜牙さんもなに呑気に飲んでいるんですか!？」

「と、ともかく約束通りに足止めはしてくれてるみたいだね」
「う、うん」

その後、両者戸惑いながらもジュエルシードの争奪戦が開始。
成長著しいなのはも、まだフェイトには及ばず、ジュエルシード一つを明け渡してしまうのであった。

【不定期更新】黒焰と葵の改めて説明1（前書き）

更新がなかなかできなかつたりするので合間埋めのために。
クロスしているオリジナル作品の『風光の真竜』と『継承される運命』の様々な説明です。

【不定期更新】黒焰と葵の改めて説明1

黒焰「どうも初めまして。作者の分身であり、SNS『Club Circus』では竜牙のありえたかもしれない可能性の一つとして登場している黒焰です」

葵「初めまして……かな？ 『風光の真竜』では紅一点、あと黒焰さんと同じく『Club Circus』で登場しているアオイ改め、神尾葵です」

黒焰「今回はダメ作者の更新があまりにも遅いので、復習も兼ねてこの作品のクロスである『風光の真竜』（以降『風光』）と『継承される運命』（以降『運命』）の設定について説明しようと思います」

葵「ダメ作者って……」

黒焰「いいんだよ。かなり遅れているつてのに他のSS見ていたりするんだから。SNS内でのSSを書いているならまだしも」

葵「あはは……。それで今回説明するのは？」

黒焰「両作品での世界観設定だな」

葵「基本的にどちらも世界の名前っていうのはないんだよね」

黒焰「そうだな。都市の名前と大陸の名前っていうのはあるが、世界単位での名前はないな」

葵「『風光』ではゴルドルクとカムイ、『運命』では華音に少破、あとはキーカス大陸だね」

黒焰「『運命』では設定上だけだが、他に尾根、初音、絵亜、蔵等があるがな。世界に名前がないのは特に意味はない」

葵「ないの？」

黒焰「うむ。初期設定では『風光』のほうにはドラゴラムだったかドラグリムだったかの名前はあったんだが。別に決めてどうこうなるようなものでもなかったし」

葵「次は生活基準。これはどうなっているの？」

黒焰「うむ。『風光』は中世ヨーロッパレベル。だが貴族制はなく、都市長なるものが存在する。部族の長が大きくなったようなものだな」

葵「それで私みたいなモンスターハンターを集って戦わせる大会を開いて収入を得るわけだね」

黒焰「そうだな。ちなみになんで金銭価値が統一されているのかは聞いちゃダメだ」

葵「決まってるじゃないんだね……」

黒焰「ゴホツゴホツ！！次に『運命』。こちらは現代の日本と特に変わらない。ただし魔力があるせいか、一部現代より特化している部分があったり、逆に劣化している部分もある」

葵「具体的には？」

黒焰「武器を異世界へとしまつ異空石や精神世界での擬似戦闘を行うことのできるMWSは特化している部分。交通の分野では守護獣に頼る部分が多くて現代より劣化しているな」

葵「あ、そつか。竜牙さんが所属している高速移動屋のソニックライトニングだね」

黒焰「ま、郊外だと魔獣が出るしな。すぐに迎撃できないと困る。あとどちらの世界も人間同士の争いは少ない」

葵「なんで？」

黒焰「そりや全人類共通の敵がいるしな。『風光』だと野生のモンスター。『運命』だと魔獣といったようにな」

葵「なんか複雑だね……。自分達より脅威になる種族がいるから結束するって……」

黒焰「ま、人間なんてそんなもんさ。それでもないと言えなかった

りするんだけど」

葵「それじゃあ『風光』と『運命』。この二つの関係は？」

黒焰「時系列設定でも述べているわけだが、基本的には『運命』の過去が『風光』となっている。だが細かい部分で歴史が異なっているんだ」

葵「それはどこなのかな？」

黒焰「一番古いところから言えばブラストが幻獣界にいるときから『運命』の歴史からするとそのころからブラストは武器を使っているんだ。そしてショウと出会った後、タイダルからかつての武器を受け取ることになっている」

葵「『風光』だとコウヘイさん達と出会って初めて武器を使っているね」

黒焰「ま、そのコウヘイと出会ったのが一番の違いだろうな。そのおかげで『運命』の歴史だと、真竜杯でのタイダルとの戦いで初めて光の覚醒ができるようになってる」

葵「一つの違いでそこまで変わるんだ」

黒焰「行動一つで歴史は変わる。ちなみにコウヘイは『風光』でも『運命』でもないまったく別の歴史の存在だぞ」

葵「えっ？ そうなの？」

黒焰「『風光』でも『運命』の歴史と同じモンスターの暴走は起こるからな。シヨウとアオイがいなければブラストとタイダルもいないし、暴走の元凶が世界を滅ぼすのも容易。『運命』だとコウヘイとシヨウは会うわけだからそれよりも未来のコウヘイがシヨウを見て気づかないわけないし」

葵「……元凶？」

黒焰「それはこの作品でも最重要の謎だ。余談だが『運命』側の歴史はクロスオーバー編が含まれなかった改訂前のものを参考にしていたりする」

黒焰「さて、今回はこの辺で終わリかな。次回は『風光』におけるモンスターと『運命』における魔獣、守護獣について説明するぞ」

葵「次回って……またやるの？」

黒焰「作者がまた更新を遅らせないとも思っのか？」

葵「あ、あはは……」

黒焰「それじゃ、何か他に聞きたい事でもあつたら感想をくれ。ちなみに作者は感想がなくて焦ってる」

葵「そ、それじゃあまた次回」

第19話 それぞれの魔法少女

温泉旅行から数日。

竜牙は一人、高町家を後にした。

表向きは翔と出会う前の知り合いに会うため。

なのはとユーノには元の世界に関係しそうなものがあつたため、遠方まで調べてくると言っている。

もちろん知り合いなどいるはずもなく、元の世界に関係ありそうなものも、見つけてなどいない。

竜牙の本当の目的はというと……。

「よう。少し遅れたか？」

「いいや、時間通りさ。あたしが早めに来ただけの話だよ」

そう、アルフに会ったためだったのである。

海鳴温泉の池の畔にて話で翔の足止めに成功し、アルフが自身を信頼出来るようならば、本格的にフェイトの傍にいて協力すると言ったのである。

その場合の待ち合わせ場所に、約束通りアルフが来たということは、かなり竜牙は信頼されているようだ。

「さて、これからあたしらの拠点へと向かうわけだけど……」

そう前置きして竜牙を睨む。

「フェイトに何か変なことでもしたらその喉、噛み千切るからね」

そういつて犬歯をみせるが、アルフ自身そこまで本気ではない。度を過ぎれば本当にやるかも知れないが、主人であるフェイトが少

なからず惚れている相手なので冗談半分である。
だが竜牙の反応は淡白だった。

「何歳差離れていると思うているんだ？　んなことあるわけないだろ」

そんな竜牙の反応にため息を吐きながら、聞こえないように一言。

「フェイト……結構厳しい道のりかもしれないよ……」

「フェイト、ただいま」
「お帰りアルフ。どこにいった……の？」

アルフの声を聞いて玄関へと出向いたフェイトは、アルフの傍らにいた竜牙をみて驚いた。

「よう」

竜牙が手を上げて挨拶するも、驚きが強かったのか呆けたままのフ
ェイト。

竜牙とアルフは顔を見合わせて苦笑する。

「外を歩いていたらコイツを見つけてね。聞いてみればあたしらに
手を貸すために家を出たって言うんだよ。だから連れて来たってわ
けさ」

アルフの説明には一部、穴がある。

普段のアルフなら、ば例え温泉での約束通りに行動を起こしたこと
があっても、フェイトの敵がいた家に居候していた相手は自分達の
アジトには入れなかったであろう。

それを許すだけのことが、竜牙とアルフの間に何かあることを臭わ
せるのだが、今のフェイトは突然現れた竜牙のことが気になり、そ
れどころではない。

「な、なんで……」

そこまでして自分の味方をしてくれるのか。

そんな想いがフェイトのその一言に籠もっていた。

それに対して竜牙は一言。

「お前が気に入ったから。そう言っただろう」

それは竜牙とフェイトの二度目の邂逅で、竜牙が言った言葉。

「あ……」

目の前のこの男は、竜牙は自分を二度も助けてくれた。

気を失った自分を救って自分にジュエルシードを渡してくれて、さらに約束通りに自身の弟子を自分達のほうにこないように、足止めしてくれた。

その2つの出来事に先ほどの竜牙の言葉で、フェイトの竜牙に対する疑いは欠片も存在しなくなった。

「……はいっ!!」

一筋の涙を浮かべながらの笑み。

それは最近アルフが見ていなかった、心からの笑みであった。

その笑みに、自分がフェイトを利用していることに心が痛む竜牙。だがその程度では竜牙は止まらない。

「……よろしく頼む」

既にその身は、幾多の■■や■■に慣れているのだから……。

「翔お兄ちゃん!! 私に戦い方を教えて!!」

その頃、なのはも一つの覚悟を決めていた。

二度のフェイトとの戦いによってそのどちらも敗れたなのは、故に経験豊富な翔に戦い方を教わることにしたのである。

「……何で強くなろうとするのかな？」

「えっ……」

翔はなのはの言葉に即答はしなかった。

翔自身は生きるために必要だったからこそ、強くなろうとした。

ブラストという強力な相棒はいたものの、地球とは違う環境である彼の世界は脅威が多かった。

さらに彼自身の運命も激動のもの。

だからこそ翔はブラストの助けだけではなく、自身も強くならなければならなかった。

だがなのはは違う。

ジュエルシードを自分の意思で集めるという決意はしたものの、それはフェイトと出会う前の話。

今までの暴走体を抑えるというものとはまったく違った人に対しての戦い。

「なのはちゃんが自分で戦うことはない。僕が戦っている間にジュエルシードを取ることできる」

「それは……」

フェイトと出会う前にジュエルシードを集めていたときもそう。基本的に竜牙や翔のサポートがあった。

「迷っている僕が言えることでもないけどね。僕はなのはちゃんに人を傷つけてほしくない。……強くなりたいのはあの子と戦うためでしょ？」

「……うん」

「なら……何で強くなろうとするのかな？」

なのはは少しの間俯いていたが、すぐに顔を上げて翔と目を合わせる。

「話をしたい。そう思ったの」

「話？」

「うん」

フェイトとなのはが二度会った間に交わされた会話は、限りなく少ない。

一度目は話しても意味がないと切り捨てられ、二度目は名前こそ聞けたものの、関わらないでと突き放された。

だがどうしてもなのははフェイトと話がしたかった。

「でも今の私じゃ今のフェイトちゃんにはすぐに負けちゃう。だから強くなって、勝って話を聞いてもらうの」

正直その言葉はかなり疑問が残る。

話を聞くと言っているのに強くなって勝つというのは、矛盾が含んでいるように思える。

だが交友関係が少ない翔はその言葉で納得。

「わかった。魔法のほうは教えられないけど、僕にできることなら手伝うよ」

こうしてなのはの訓練に翔が加わることになる。

フェイトと同じ高速戦を行う翔なのはの最高の訓練相手であった。そして二人の魔法少女はそれぞれ、異世界からの竜騎士達と共にあるのであった。

第20話 友を説く英雄、たちこめる雷雲

竜牙が高町家を出て、フェイト側へとついてから数日。

意外にもなのは、フェイト共にジュエルシードを見つけることが出来ていなかった。

今までのものが偶然、発動が早かったただけなのかも知れないが……。

そんな中、なのはとアリサが喧嘩をした。

原因は最近のなのはの素っ気ない態度。

どうやらフェイトとのかを考えているうちに、上の空になっていたらしい。

魔法のことを話すことができない以上、ある程度は仕方がないことでもある。

「そこのとこどう思います!? ショウさん!!」

「ア、アリサちゃん落ち着いて……」

「あ、あはは……」

とはいえ、頼まれた買い出しの途中で突然相談があると言って、連れ出された翔は苦笑するしかない。

だが大体の事情を聞き、自分も責任の一端を担っていることに気付いた以上、放っておく気にはなれなかった。

「まあなのはちゃんが悩んでいることは、多分僕も知っていることだとは思っ」

「ならっ!!」

即座に聞こうとしたアリサに対して待ったをかける翔。

「それで、君達は僕にその原因を聞いてどうするつもりかな？」

「そ、それはもちろん……」

「アリサちゃん。翔さんが言いたいのは、そういうことじゃないと思うよ」

アリサの言おうとしたことを察し、さすががそれを言葉で遮った。そして翔の言わんとした意味を、自分の言葉で述べる。

「翔さんが言いたいのは、なのはちゃん自身が言いたくないことを、翔さんから聞いていいのかっていうこと」

ですよねと、視線を合わせてくるすずかに頷く翔。

「別に僕に相談すること自体は構わない。でも所詮知り合いの僕に答えを聞くのはダメだ。なのはちゃんは事情があつて話せないだけだからね」

それに、と前置きしてさらに言葉を続ける。

「ただ何でも話せるのが友達ってわけじゃない。話してくれるのを信じて待つというのも友達、そうじゃないかな？」

「あつ……」

翔の言葉に驚くアリサ。

「……はいっ！」

だが納得すると、力強く頷くのだった。

隣でその様子を見て嬉しそうなすずか。

だがおもむろに携帯を開くと、突然慌てだした。

「アリサちゃん時間!!」

「えっ? …… ああ!!」

すずかに言われて時間を確認したアリサも、慌てだす。

何故なら、翔を見つけたのがヴァイオリンの稽古のために車で向かっていたとき。

故に元から、稽古の時間まであまりなかったのだ。

しかしなのはと喧嘩した後で、たまたま翔を見かけたために、アリサもすずかも時間のことをすっかり忘れていたのである。

「ごめんシヨウさん!! あと相談に乗ってくれてありがとう!!」

「ありがとうございました。あ、アリサちゃん待って!!」

二人とも翔に一礼すると慌てて駆けていき、車に乗って急いで稽古へと向かっていった。

それを暖かい目で見ていた翔だったが、突然頭に声が響く。

（まさか翔が相談される側になるとはな）

そう皮肉気味に話すのは翔の守護獣であるブラスト。

だがそのブラストの言葉に、翔は苦笑混じりで返す。

「言っておくけど……あれはブラストと生活した日々から感じたことだよ」

（む……）

思い返すのは幼竜だったブラストと出会ってから、一度別れるまでの日々。

最初は何も話してくれなかったブラストが、翔と生活するにつれ心を開き、最後には想いを通じ合わせたときのこと。

「あのときのことがあるから今の僕がある。ブラスト、僕にとっての君は守護獣や戦友である前に、一番の親友なんだよ」

（……ふん。勝手にしろ）

そうそっけなく返すブラストだったが明らかに照れが感じられ、それに苦笑する翔であった。

――夜。

フェイトはアルフとともにビルの屋上にいた。
理由はその近辺でジュエルシードの反応があったから。

「にしてもよかったのかい？ 竜牙の奴には付き合ってもらわなくて」

「うん。これ以上、迷惑をかけたくないから」

そう、この場には竜牙はいない。

今は別の場所でジュエルシードを探しているだろう。

「……またあれ食わされるかもしれないよ？」

「……………ごめん。思い出させないで」

二人が青くなった理由は先日の食事のとき。

カロ・ーメ・トとウィ・ーイ・ゼリーというあまりにもなフェイトの食事に、竜牙が切れたのだ。

幼き頃から戦闘に明け暮れた竜牙。

だが戦いを行うものとして、最低限にも食事だけはしっかり取っていたのである。

それに比べてフェイトは少食の上、その食事も偏っているときていた。

それも改善しようとしない。

故に竜牙は最終手段をとることにしたのだった。

「……………竜牙、なんだいコレ？」

「芋虫」

「……………いや、そういう事言っているんじゃないんだけど」

皿の上、それもあるうことにフェイトの皿の上に置かれていたのは白い芋虫。

「食料」

「ええ！！？」

フェイトは驚くが、実際に食べられている地域もある。

そしてそれは竜牙の世界でも同じ。

意外と栄養価は高いので、山での遭難時にはよく竜牙は取って食べ

ていた。

まああくまで非常食であり、味は保障しない。

「これを食べるか。ちゃんとした食事を取るか。どっちかにしろ」

「う、うう……」

竜牙のその脅迫により、フェイトもちゃんとした食事を少しずつだが量をとるようになった。

だが今回のことでまた食べさせられそうになるかもしれない。

「それでも……母さんのためだから」

「フェイト……」

そうフェイトは言うと言バルディッシュを構えた。

漠然とわかるものの詳しい場所まではわからないので、魔力を流して強制的にジュエルシードを発動させようというのである。だがフェイトが始めようとする前に、アルフが待ったをかける。

「フェイト、あたしがやるよ」

「えっ？ でも……」

「いいからいいから。あたしを誰の使い魔だと思っているんだい」

そう言っただけでアルフは魔力を解放する。

オレンジの魔力光が立ち昇り、辺りを雷雲がたちこめる。

そしてジュエルシードが発動。

そしてそれは夜の街で同じくジュエルシードを探していた、なのは達も気付くのだった。

第20話 友を説く英雄、たちこめる雷雲（後書き）

2011/4/29からのGW期間中に、連載予定で暖めていた新規小説を連続投稿します。
詳細は活動報告にて。

第21話 暴発する魔力（前書き）

更新遅いなあと思いつつ……。

第21話 暴発する魔力

「ユーノくん!!」

「ジュエルシールドだ!!」

強大な魔力になのはとユーノが気づき、その波動の下へと急ぐ。それと同時にユーノは翔へと念話を繋いだ。

（翔さん今どこですか!?!）

（ごめん!! かなり遅れそう!!）

運の悪いことに翔は全く別の場所でジュエルシールドを探索していた。移動系の魔術を使おうにも竜牙から認識阻害の魔術も教わっておらず、ユーノの結界でもその範囲に入らないほどのために普通に走って向かうしか方法がない状況。

つまり今回は翔による援護はあまり期待できない。

（わかりました。僕達でできる限りやってみます）

（うん。できるだけ急ぐからそっちも無理しないで）

翔との念話を切ると同時にユーノはなのはを見る。

それに対してなのはは頷くと、レイジングハートを取り出す。

ユーノはそれを確認すると魔法を発動させた。

「封時結界、発動……!!」

「レイジングハート!!」

アルフの魔力放出によって誘発される雷。
その魔力に導かれるようにジュエルシードが発動し、青き波動を生み出した。

「見つけた……！！」
「でも……」

フェイトが見つけたことにわずかに喜ぶ中、アルフが現状を確認する。

「それはあっちもみたいだね」

眼下に見えるのは色が変わる世界。
封時結界が張られていく証。

それは彼女、なのはが現れた証拠でもある。

「いくよ、バルディッシュ」

フェイトはすぐにバルディッシュを起動、封印体制に入る。

「レイジングハート」

それはバリアジャケットを纏ったなのはも同じ。

レイジングハートをシューティングモードへと変更する。

そして二人はほぼ同時に砲撃が放たれる。
それは同時にジュエルシードへと直撃し、封印の過程もほぼ同時に行われていく。

「リリカルマジカル……！！」

「ジュエルシード、シリアル19！！」

「「封印！！」」

二つの砲撃を受けて沈黙するジュエルシールド。
そのジュエルシールドに向かって歩くなのは。
未だ確保していない状況だったが、あることを考えていた。

「やった。なのは、早く確保を！！」
「そうはさせるかい！！」

ユーノが確保を促すが、それをアルフが邪魔をする。
それを察したユーノはシールドを張り、その突撃を防いで距離を取らせた。

そしてそのシールドが解除された後、彼女はなのはのすぐ傍にいた。

「あのときは自己紹介できなかったけど」

なのははフェイトに話しかける。
何故こんなことをするのか。

「私、なのは。高町なのは」

どうしてそんな寂しい目をしているのか。
ただ、彼女のことを知りたいがために。

「私立聖祥大付属小学校三年生」

Scythe Form.

だが彼女からの返答はデバイスの展開。

「っ!？」

その行動になのははレイジングハートを構える。
なのはとフェイト、3度目の戦いが始まった。

——この子、前より確実に強くなってる……!？

フェイトはなのはの成長に驚いていた。

竜牙からほんの数日前まで魔法を知らなかったことを聞いている。
それから考えると急激な成長速度なのだ。

「フェイトちゃん!!」

戦いの最中、言葉をかけるのはに対してフェイトはデバイスを構えたまま行動を止める。

「前に話しても何も変わらないって言ったけど、何も話さずに争うのは嫌なんだ！」

なのははフェイトに対してその想いを言葉にしてぶつける。

「私がジュエルシードを集めるのはユーノくんの探し物だったから、だけど色々な事があって自分の意思でジュエルシードを集めるようになって、自分の暮らしている町や自分の周りの人に傷ついてほしくないから。それが私の理由……！」

「……私は」

なのはのその真摯な想いに、戸惑うフェイトは口を開く……が。

「答えなくていいフェイト……！」

アルフが戸惑うフェイトを一喝する。

「今重要なのは私達の目的、ジュエルシードだよ……！」

そのアルフの言葉にフェイトは思い直し、行動する。

一度強力な魔力がぶつかり合ったのだ。

竜牙がいつ気づいてもおかしくない。

だからこそ早めに決める必要があった。

そしてフェイトは突然、なのはに背を向けてジュエルシードへと向かう。

なのはも一歩で遅れるものの、このままフェイトにジュエルシード

を渡すわけにはいかないと急いだ。
そして……。

ガキッ！！

「「「「えっ………？」「」「」

4人の思いが重なる。

ジュエルシードの目前でレイジングハートとバルディッシュ、二つのデバイスが組み合っていた。

封印したとはいえその傍で魔法戦を行い、ジュエルシードの封印は解けかけていた。

そんな状態のジュエルシードの目の前で、高い魔力を持つ魔導師二人のデバイスがぶつかり合ったらどうなるのか？

ズガアアアン！！！！

「「きゃあああ！！？」」

膨大な魔力がジュエルシードから放出され、レイジングハートとバルディッシュに輝が入り、なのはとフェイトは弾き飛ばされてしまったのだった。

【無限転生者ネタ】呪われし魔法少女と黒竜騎士（前書き）

本当は2万アクセス記念であげようとしていたんですが、完全にピーク過ぎそうなので先に出すことにしました。

なのは時間軸ではなく、別の連載の無限転生者シリーズの一発ネタです。

「無限転生者ネタ」呪われし魔法少女と黒竜騎士

暁美ほむらは魔法少女である。

長きに渡り人々を襲う魔女と戦ってきた熟練の魔法少女だ。

そんな彼女の目的はただ一つ、鹿目まどかを救うこと。

そもそも彼女が魔法少女になったのは、かつて自分を救ってくれたまどかが魔法少女として戦い、ほむらの目の前で死んでしまったからである。

そのためにキュウベえと魔法少女としての契約を行ったほむらは、まどかと出会う前に時を遡った。

それからの彼女は努力と苦悩との連続だった。

魔法少女としてのほむらの能力は時間操作。

能力そのものは強力だったものの直接的な攻撃力はなく、銃器や爆弾といったものに頼った。

それでも魔法少女として経験の少ない彼女ではまどかを救うまでにはいかず、再びまどかは死んでしまう。

そしてまた起こる時の逆行。

契約に従い、ほむらはまどかを救うまで逆行を繰り返す存在となっていた。

だがほむらはそれでよかった。

いつかまどかが救われるときがくるならばと努力を重ねた。

そんなほむらに突きつけられたのは絶望。

魔法少女の行き着く末路、キュウベえの正体と真の目的。

それはほむら……いや、魔法少女全てに対して絶望の真実だった。

だがほむらは諦めない。

例えばどんな絶望が待ち受けていようと、まどかを救いたい一身体で魔法少女と戦った。

そんな彼女が、彼と出会ったのは偶然以外の何物でもない。

——何なのアレ……

ほむらの目の前には魔女の姿。

幾度となく繰り返した戦いの中で、いつもそれほど苦戦せずに勝つて来たそれほど強くはない魔女。

だがその繰り返しの中になく異物がそこにはいた。

「何だつてこんなのがいるんだか……」

異物の正体は一人の男。

歳はほむらと同じくらいで黒いバンダナを頭に巻いている。

不思議なことに彼は魔女という存在を認識しながらも、恐怖を抱いていないようにほむらには思えた。

「ま、どうでもいいが……俺に敵意を見せたからには」

そして、ほむらの思ったことは事実となる。

「覚悟はできているんだろうな？」

男が取り出したのは一つの石。
そして一言呟いたかと思うと、その石は刀へと変化した。
それを見て魔法かと驚くほむらだったが、すぐに展開が動く。

「瞬光」

そう聞こえたときには彼は消えていた。

すぐに辺りを見渡すと、魔女の正面にいたはずの彼が魔女の右後方へと移動している。

そして対象を見失っている魔女に対して飛び掛ると、紅い刀を振り抜く。

そこから放たれるのは刀の色と同じ紅い斬撃。

その斬撃に切り裂かれ、身体の一部を失って叫ぶ魔女。

「何だ。図体の割には弱いな」

そんな姿を見て彼は冷ややかに感想を言う。

そして刀を肩へと担ぎ、止めの一言を放つ。

「刹那……」

魔女の周囲に影が浮かび上がる。

その影は全て男の姿をしており、その全てが刀を構えていた。
そして……。

「乱舞!!」

彼のその言葉を合図に、影達は魔女へと攻撃を仕掛ける。
その一つをとってもほむらが認識できないほどのスピード。

その一瞬に時間停止を行えば確認できたのかもしれないが、その数は百を大きく超える。

そんな数による高速の連撃が魔女へと襲い掛かったのだ。

魔女は断末魔をあげることもなく、粉々に切り刻まれて消えていく。残ったのはほむらに背を向ける彼の姿のみ。

「で、お前は？」

「っ！！？」

彼を呆然と見つめていたほむらはその言葉に驚く。

気付くといつの間にか彼は頭だけをほむらへと振り返っており、ほむらの存在に先ほどから気付いていたようだ。

長きに渡る戦いの経験をしているほむらですら超える、彼のその実力を前に戦うという選択肢はない。

「私は暁美ほむら。魔法少女よ。あなたは……？」

「俺か？ 俺は……」

名前を明かしたほむらに対し、彼は正対して自身の名を明かす。

「竜牙。異世界の知識を持つ竜騎士、狩野竜牙だ」

呪われた運命を持つ魔法少女。

そんな彼女の前に現れたのは、いくつもの世界を生きた無限の転生者。

本来の歴史にはない彼が関わることによって、魔法少女達は救われるのだろうか？

【無限転生者ネタ】呪われし魔法少女と黒竜騎士（後書き）

これは一発ネタです。

というか竜牙がいると全て一撃の下に叩き切りそうなので、話が成立しないという……。

とあることでワルプルギスの夜も倒せますし……。

というわけでこのまどかマギカは連載予定なしということ。

【不定期更新】黒焰と葵の改めて説明2（前書き）

更新遅れてすいません……。
というわけで第2回です。

【不定期更新】黒焰と葵の改めて説明2

黒焰「やはりきてしまった第2回、モンスターや魔獣、守護獣の説明をするぞ」

葵「あはは……なんで更新が遅れたのかな？」

黒焰「今度はゲームをやっていたな。『神狩りアルケミーマイスター』とか『戦極姫3』とか『Rewrite』とか」

葵「あ、あはは……」

黒焰「『Rewrite』以外物の見事にイチハチ禁ゲームだし時間のかかるものばかりだし……少しは遠慮しろっての」

作者（すんませんm（――）m）

葵「と、とにかく。今回はゲストを呼んでいるんだよね」

黒焰「おう。俺の守護獣、運命の女神ノルンの一人、ウルドの雪菜だ」

雪菜「こんにちは葵様」

葵「あ、雪菜さん」

雪菜

黒焰の守護獣、運命の女神ノルンの一人である過去を司る女神ウル

ド。

黒焔を助けるために禁固を犯したため、身体は幼女になっている。
銀色のロングヘアー。

過去視ができる。

雪菜「またこの解説ですか……」

黒焔「『Club circus』のところでもやったな。今回は
守護獣の説明ということで呼んだんだ」

雪菜「では早速始めましょう。まず私達守護獣に魔獣ですが基本的
には人を襲うほうが魔獣、人と共に生きるのが守護獣と判断してい
いでしょう。もちろん四神などの例外はありますが。どちらも魔力
で肉体を構成していますが、守護獣の場合は主となっている人間の
精神に魂の核があります」

雪菜「種類としては和洋中となんでもありで、基本的にはモンス
ターや神獣と呼ばれるもの。犬や猫などの普通の動物。特殊ですが剣
などの物質や私のような神まで様々です」

葵「私も守護獣がいるからわかるけど……具体的にどんなのがい
るの？」

雪菜「そうですね……モンスターとして代表的なのはドラゴン、ペ
ガサスやハーピーなどですね。他には精霊も含まれ、四大精霊のサ
ラマンダーやウンディーネもそうですね」

黒焰「ノルンも含まれるが神というのは守護獣としても魔獣として
も人の前にほとんど姿を現さない。だが属性を司る者は意外と出る
傾向がある。炎のイフリートとかな」

雪菜「まああまり人間界に降りることはしませんから。それこそそ
の人間との縁が深くない限りは守護獣となることは少ないですね」

葵「？ 縁が深くなると守護獣になるの？」

黒焰「ああ、その辺は詳しく話したことなかったな」

雪菜「それでは説明しましょう。守護獣というのには先天性と後天
性の二種類があります。先天性は人が生まれたときからその精神に
守護獣が宿っている場合。後天性は契約によって魔獣を守護獣とす
る場合です。先天性の場合は家系によってだいぶ決まるのでそれが
縁の理由ですね」

葵「私の場合は後天性……かな？」

黒焰「そうだな」

雪菜「後天性ですが魔獣を守護獣とするには双方の信頼があって初
めて成立します。ほとんどありませんが、『継承される運命』で少
しあったように利害の一致で成立することが多いですね」

葵「じゃあ私の時代、『風光の真竜』のモンスターと魔獣、守護獣の違いは？」

雪菜「魔力ではなく本当の肉体を持っています。人間の味方をしていても害をなしていても呼び方に違いはありませんね」

黒焰「ただしこの時代だと人の前に姿を現すのは獣や魚類だけで人型はほとんどいないな。ドラゴン、ユニコーン、クラーケンなどだ」
葵「それじゃなんで『継承される運命』では肉体を持たなくなったの？」

雪菜「それは一度人間界が消滅しそうになったときの制約ですね」

黒焰「『時系列設定』であつた正史でアオイが死んだ後の話だな」

雪菜「シヨウが死んだ後から少しずつ減少していたんですが一度モンスターが世界から消えた後、人間界と幻獣界の間で制約が設けられてそのままの肉体では人間界に降りられないようになったのです」

黒焰「無闇に人間界に降りるものがないようにする制約だな」

雪菜「そのおかげで一部の例外を除いてモンスター側が人間界を破壊するような要因はなくなりました。……その一部が厄介なんですけどね」

黒焰「さて、今回はコレで終わりだ」

葵「雪菜さん。ありがとね」

雪菜「いえ。それでは先に帰っていますね」

黒焰「次に説明してほしいものは募集するぞ」

葵「作者さん、ちゃんと書いているかなあ……」

黒焰「無理だろ。ダメ作者だし」

葵「あ、あはは……」

第22話 圧倒する力

膨大な魔力を放出するジュエルシード。

封時結界が破られてないのが不思議なくらいである。

「なのは大丈夫!？」

「う、うん。でもレイジングハートが……」

「フェイト!？」

アルフの悲鳴にも似た声になのは達がフェイトのほうを見ると、フェイトがジュエルシードに向けて手を伸ばしているところだった。そしてデバイスも持たずに、ジュエルシードをその手で包み込む。

「止まれ止まれ止まれ止まれ……」

「ダメだフェイト!!」

フェイトはそのままジュエルシードの封印を始める。

だが膨大な魔力にフェイトの手が切れ、血が噴出す。

それでもフェイトは封印を止めない。

だがその頑張りも虚しく、ジュエルシードの魔力は高まっていき…。

「止まれ止まれ止ま……っきゃあ!!?」

「フェイトちゃん!？」

再びのジュエルシードの暴発。

それによってフェイトは空高く打ち上げられ、それを見ていたなのは悲鳴が響く。

アルフが飛び出すも、ジュエルシードから放出する魔力のせいでフェイトの下に辿り着くのは困難。

誰もがフェイトが地面にたたきつけられるのかと思ったそのとき、何かが高速で現れてフェイトを抱きかかえた。

「えっ……？」

「そんな……」

その正体を見てなのはとユーノは目を見開く。

そこにいたのはいないはずの人物。

黒を基調とした服装に長身の身体。

それはなのは達にとってよく知る人物。

「竜牙お兄ちゃん！？」

狩野竜牙、その人だった。

竜牙は驚くなのは達を一瞥するが、すぐに抱きかかえているフェイトの様子を見る。

「フェイト……」

「ん……うう」

苦しげに呻くも起きる様子はない。

心身の疲労が限界を迎えて気絶しているようである。

「アルフ。フェイトを連れて下がれ」

「あ、ああ」

フェイトの様子を確認した竜牙はそう言ってアルフへと受け渡す。アルフは戸惑いながらもフェイトを受け取って距離をとった。

「竜牙さんどうして!?!」

ユーノが声を張り上げるが、それでも竜牙はなのは達のほうを向かない。

ジュエルシールドが暴走していながらもただ空の一点を見つめるだけ。

「……来たな」

その竜牙の呟いた言葉にユーノは竜牙の視線の先を見る。

そこにはウィンドリムによって空を飛び、ジュエルシールドのもとへと急ぐ翔の姿。

「竜牙さん!?!」

その翔も竜牙がそこにいることに驚いていた。

もつともそれはなのは達とは違い、竜牙がなのは達の前に姿を現していたことに対してだったが。

その竜牙は翔に指示を出す。

「翔、全力で魔術防壁を張れ」

「えっ!?!?!」

「俺の魔力で無理やり押さえつける」

「あ、はいっ!?!」

翔はそのままなのは達の前に降り立ち、手のひらを竜牙とジュエルシールドのほうへと突き出す。

だが竜牙の指示に待ったをかけるものもいた。

「無茶だよ竜牙!?!」

それはフェイトを抱えたアルフ。

「フェイトが全力で封じようとしても無理だったんだ。あんたじゃ……！？」

「少し黙っているアルフ」

見ていなかったであろう竜牙に忠告をしていたが、竜牙のその言葉で黙った。

その目を感じたこともない威圧感を見たことによって。

その間にも竜牙はジュエルシードに近づく。

そしてようやく手が届く距離になったとき、両腕を伸ばして手のひらを重ね合わせるように近づけ始めた。

「コンプレクシオ・アビス」

そう言った瞬間、黒いエネルギーの球体がジュエルシードを包み込む。

だが未だに放たれる魔力は変わらない。

「っ！！ ホーリーアブソリュート！！」

しかし翔は嫌な予感がしたのか自身の持つ最強の防御魔術、光属性の結界を竜牙を中心に張る。

その間にも竜牙は手のひらを近付け続ける。

それに伴って球体が縮んでいくがしばらくするとその球体が歪み出し、魔力が強烈すぎるのか竜牙の服の一部が弾け飛んだ。

だがそれでも竜牙は止めない。

上半身の服が弾け飛ぼうとも、手だけでなく腕までも全体に裂傷が奔ろうとも、なのは達やユーノがその姿を見て叫んでも止めない。

そのまま翔が張った結界が震えながらも、ジュエルシードを包んだ球体は竜牙の手のひらに収まるまでになった。

そして……一瞬の閃光と共に爆音が響き、翔の結界が弾け飛んだ。

「くう!!?」

「きゃあ!?!」

翔は結界が破られたことによって、他は爆音によって声を漏らす。幸いなことに封時結界は破られてはいないものの、翔の全力の防壁を破るほどの魔力が放出されたのは確かだった。

「っ……竜牙さん!!?!」

さすがの竜牙とはいえどあの魔力爆発で無事であるはずがない。

そう思い爆音で閉じていた目を、竜牙が立っていた場所に注視する翔。

「ふう……」

そこにいたのは全身傷だらけになりながらも、左手に暴走の収まったジュエルシードを持つ竜牙の姿。

その傷の度合いは誰がどう見ても立っているのが不思議なほどで、その光景に誰もが言葉を失う。

そんな周りの様子を無視して竜牙は右手で異空石を取り出し、爆癒を取り出す。

「ヒール」

そう唱えると徐々に竜牙の身体から傷が癒えていく。だが完全に癒えるのを待つ前になのは達に背を向けて歩き出した。

「いくぞアルフ」

「……」

「アルフ」

「あ、ああ……」

未だに呆けていたアルフだったが、竜牙の言葉に気づいて共にその場から去りだした。

その光景をただ呆然と見ているだけのなのは達。

「——翔」

「えっ……」

その声に翔は辺りを見渡す。

だがその声の主は見当たらない。

だがその声に聞き覚えがあった。

「もしかして……アルテルム？」

それは竜牙の守護獣、アルテルムのものだった。

第23話 根源と……おしおき？（前書き）

今回は解説。

繰り返しになっている部分があるかもしれませんが、ホントに書きたかったのは後半だったりw

第23話 根源と……おしおき？

ジュエルシードの暴走、それに旅に出たはずの竜牙の出現と色々あった場から離れ翔となのは、ユーノは公園に来ていた。

そして姿の见えない竜牙の守護獣、アルテルムもそれに着いていた。

「アルテルム。姿が見えないっていうことは完成したの？」

「いや、光独自のは無理だ。所詮闇の衣に背景を透過させただけに過ぎない」

「ちょ、ちょっと何でそこなんですか！？ 竜牙さんのことは！？」

何事もなかったかのように話し始める翔とアルテルムに驚くユーノ。そこで翔とアルテルムはジュエルシードのこたごたで事情を話していなかったことに気づく。

「ああ、そういえば話していなかったね」

「竜牙がフェイトの側にいることだな？ 単純だ。あっちの黒幕を探りにいっただけだ」

「……えっ？」

アルテルムから告げられた真実に呆然となるのはとユーノ。それもそうだろう。

何せフェイトの側にいたのかと思ったたらいきなり黒幕と言い出したのだから。

「まあ少しは考えてごらん？」

そのまま停止したままの二人を見て翔が説明する。

「まずフェイトちゃんはジュエルシードを追っている。コレは間違いないよ？ でもどうやってジュエルシードがこの地球にあることがわかったのかな？」

「それは調べたからじゃあ……」

「確かにできるかもしれない。でもそれはジュエルシードの存在までだよ。それを言ったらフェイトちゃんが輸送船を襲撃したことになる」

ユーノの意見を封殺する翔。

さすがのユーノもフェイトが輸送船を襲撃したなんてことは到底思っ
つてはいない。

「まあそれはないだろうからね。そうなるとフェイトちゃん以外に調べることができ、なおかつジュエルシードをほしがっている人がいるってことになる」

「その人が……フェイトちゃんにジュエルシードを集めさせている
って言うの？」

「ま、そうなるだろうな」

さすがに翔もアルテルムも、そのフェイトの母親がその黒幕だとは
言わない。

ごく普通に幸せな家族を持つのはにとってその事実辛いものだ
ろうから。

「ま、そういうわけだからそれを調べるために竜牙さんはフェイト
ちゃんの側にいるってこと。少し騙している感じなのは気が引ける
けどね」

「う、うん……わかったの」

とりあえず納得しているわけではないものの、なのはが渋々頷いたことによってこの話は片が着く。

「それでアルテルム。ジュエルシードを抑えたあの魔術のことなんだけど……」

話が竜牙の魔術に変わるとアルテルムはわかりにくいものの、苦虫を嚙んだような表情をした。

「あれは以前竜牙が相手の魔術などを圧縮して返そうとした魔術だ。最も圧縮できる範囲、それに伴う時間、消費魔力に難があることでボツになった魔術だが」

コンプレクシオ・アビス。

その正体は空間を掌握、圧縮して自在に操作する魔術である。だが掌握できる範囲は両手で囲える範囲のみ。

さらに掌握するのに数秒を要するために動いているものには使えず、圧縮するにはその数倍もの時間が必要。

それにもかかわらず掌握した範囲にあるものに関わらず膨大な魔力が必要と、実践ではまず使えない魔術なのである。

「ジュエルシード相手ならば十分に機能しそうだから使ったと言っていたな。まあ結果はあれだが」

言うまでもなく膨大な魔力による全身の裂傷のことである。

「あの……」

そこでユーノが口を開いた。

それは先ほどのジュエルシードのこと。

「竜牙さん……ジュエルシードを封印していましたよね？ さっき言っていた魔術でできるんですか？」

「うーん……あれは封印したと言うより……」

「強制的にジュエルシードを暴走、魔力を限界まで放出させたところか」

「え、ええ……」

あまりの方法に開いた口が塞がらないユーノ。

まさか封印したわけではなく、魔力を放出させきったとは思ってもなかったであろう。

「そういえばなのはちゃんやユーノには詳しくは話していなかったね」

そう前置きして翔は改めて自分達の魔術について説明する。

翔達が守護獣の魔力を借りて魔術を発動させているのは以前説明したとおり。

そしてその魔力にはそれぞれ属性というものがあり、それに伴った魔術でないと発動することができないと言うことも話している。

「じゃあここで問題。なのはちゃん、光っていったら何が思い浮かぶ？」

「にゃ！？ ええっと……」

突然問われたなのはは驚くも、言われたとおり想像をしてみる。

「えっと、明るい……かな？ あとはこの前授業で習ったんだけど

ものすごく速いって」

「うん、そうだね。その速いっていう特性。それが光魔術のひとつ、瞬光の根源なんだ」

他で言えば光の屈折による目の錯覚を利用した幻影魔術も光属性には存在する。

「つまりはその属性からイメージできやすいものが魔術として構築できるってこと」

ちなみに同じ光属性の攻撃魔術、イノセントノヴァの根源は竜牙ですら知らないが、実は光の粒子による放流である。

無論測定できる設備もない彼らの世界で何故そんな魔術が完成したのかと言われれば、完全な偶然としかいえない。

「じゃあ竜牙さんがやっていたあれは……」

「闇属性は基本的に負のイメージが大きいからな。収縮と外に漏らさないための消失。それがあの魔術の根源だ」

このとおり竜牙や翔達の魔術にはそれぞれ根源と言うものがある。それが属性そのままの炎だったり闇だったりするものや、今回のように属性から連想されるものなど様々である。

「そんなわけで押さえ込んだのはいいんだが完全にはいかなくてな。少し暴発したってわけだ」

「そうなんですか……」

ユーノはアルテルムの言葉に納得する。

「さて、じゃあ俺はそろそろ消えるぞ。フェイト達にはこのことは

言わないように気をつける」

「あ、うん。何か新しいことがわかったら……」

「わかつている。そのときには今回のようにする」

それだけ言つとアルテルムの気配が消え、具現化を解いたことがわかった。

「それじゃ僕達もそろそろ帰ろうか」

「なのは、時間は大丈夫？」

「にやはは……ちよつとまずいかも」

苦笑いするなのはを含め、3人は帰るために高町家へと向かう。

そんな中、翔はあることを考えていた。

それはジュエルシードを抑えるために行つた竜牙が使つた魔術の消費魔力。

翔の守護獣であるブラストだと特殊な事情があり、他の守護獣と比べて魔力保有量が多いので問題はないのだが、竜牙のアルテルムはいかに強力な守護獣の種族のひとつ、ドラゴンであつてもあの消費魔力はいささか多いように感じた。

しかしあれだけの魔術を使つたにもかかわらず、魔力消費の高い具現化だけではなく姿を隠すための魔術まで使っている。

それほどになるとブラストに近い魔力を保有していることになる。

「……何か隠していることがある？」

翔のその疑問は誰にも聞かれることなく、夜の闇に消えていくのだつた。

一方の竜牙達は……。

「ん、んう……ここは？」

「お前らの家だ」

目を覚ましたフェイトが見たのは自分が住む部屋の天井。
そして不機嫌そうに自分を睨む竜牙の姿。

「あの……竜牙？ 何か気に障ることもしたかな？」

「気に障ること？」

怯えるように聞いてきたフェイトをもものすごい勢いで睨む竜牙。
その睨みを受けてひうと怯えるフェイト。

「どっかのバカが！ 俺のことを無視して勝手に動き！ 拳句の果
てに大怪我を負ったんだからなあ！！」

「あうう！！？」

竜牙は一つ一つ言葉を切って自分が怒っていることを最大限に表す。
それに怯えるフェイトだったが、同時に竜牙に悪いと言う思いもあ

つたため素直にその叱責を受けるしかない。

「というわけで罰としてコレを食え」

「えう!？」

そういつて竜牙が差し出したのはいつぞやの食用の白い芋虫。
フェイトもさすがにこれとは思いつきり引く。

「そ、そうだ！ アルフはどうしたの？」

なんとか話を逸らそうとするフェイト。
しかし話題が悪かった。

「ああアルフなら……」

そういいながら竜牙は部屋の隅に視線を向ける。
それを視線で追うと……。

「先に食ってあつちで伸びてるがな」

「アルフー!!!？」

そこには魂の抜けかかっているアルフの姿。

フェイトの呼びかけも聞こえないらしく、「フェイト、やったよ…
…」と呟いていた。

「さて……フェイトも逝こうか」

すごい気迫を背負いながら芋虫片手ににじり寄ってくる竜牙。
結局それから逃げる事ができず、フェイトはアルフ同様魂が抜け
かかったようである。

——閑話休題。

第24話 交渉（前書き）

今回は飛び飛び。

久しぶりの更新がこんなですいません。

第24話 交渉

ジュエルシードの暴走の翌日。

フェイトとアルフ、そして竜牙はフェイトたちが住んでいるマンシヨンの屋上にいた。

理由はフェイトたちの住まいでもある時の庭園にいるプレシアに、ジュエルシードの報告をするため。

しかしフェイトとアルフの様子が少しおかしい。

「うう……」

「朝飯食べたのにまだ口の中が変だよ……」

それもそのはずで、前日におしおきとして食べさせられた芋虫の感覚が未だに残っていたのだ。

そのせいで朝食でトーストなどを食べても芋虫の感覚が思い出されて味はほとんど感じられていなかった。

「でも竜牙。あんたも時の庭園にいくのかい？」

「別に私だけでも……」

「ちよつと気になることがあるんでな」

それだけ言つて空を眺める竜牙。

フェイトはまだしも、アルフにとっては万が一のことを考えると竜牙にきてもらえるのは喜ぶことではある。

しかしそのアルフとて、竜牙の意図を全て知るわけではない。

「そろそろその時の庭園とやらないかい？　ここに長くいることもないだろう」

「う、うん。そうだね。それじゃあいくよ」

竜牙の様子に戸惑いつつも、フェイトは催促に頷いて転送を開始する。

——このときの竜牙の目的は二つ。

ひとつは今回の事件の黒幕であろうフェイトの母親、プレシアと会うこと。

そしてもうひとつはジュエルシードを必要とする理由を聞き出し、可能ならば協力することを対価に交渉をすること。

「開け、誘いの扉。テストロッサの主の下へ」

時の庭園への転移魔法が発動する。

——だがまさか、あのようなことが起きようとはさすがの竜牙でも想像しえないことであった。

「着いたよ竜牙……？」

「どうしたんだい？」

転移が終了して時の庭園内へと着いた一行。

だがその巨大で、雰囲気がいながらも豪華な内装を見て竜牙は唖然としていた。

そして同時に多少を嫌悪感も漏らしている。

実は竜牙の姓である狩野は竜牙達の世界では裏の名家として一部には有名で、それなりの地位を持っている。

だが諸々の事情で竜牙は自身の家系を嫌っており、それと同時にある程度の権力を持つ者を嫌う傾向がある。

無論仕事上だったり、それなりに付き合いがある人物に対してはそういうことはないのだが。

「いや、なんでもない。気にするな」

フェイト達に声をかけられたことによってそんな自分に気付いた竜牙は、すぐに嫌悪感を完全に絶った。

竜牙自身それが個人的な理由であることを自覚しており、フェイトにはまったく関係ないことに気付いていたからである。

「さて、お前の母親に会いに……」

話題を変えて目的であるプレシアに会いに行こうとしたそのとき、竜牙の目に何かが映って視線を留めた。

「竜牙？」

「さっきからどうしたんだい」

「いや……」

フェイトとアルフは竜牙の視線の先を見るが何も無い。
そうこうしているうちに竜牙は視線を外し、二人は何だったのかと首を傾げる。

「……悪いが先にいつててくれないか？」
「えっ？ でも……」

先ほどとは一転した竜牙の申し出に戸惑うフェイト。
それもそのはずで竜牙は時の庭園にきたことはないはずなのだ。
この広い中、竜牙を一人にするというのは気が引けるフェイト。
だが竜牙はこんなことを言い放った。

「ああそうそう。トイレいきたいんだがどこだ？」

「！？ 竜牙のバカ！！」

突然そんなことを言い出した竜牙にさすがのフェイトも顔を真っ赤にして怒り、先へ行ってしまふ。

「おい場所は？」

「そっちにいつて二番目の右の扉！！」

竜牙はフェイトの様子に気にした様子もなく再び聞き、フェイトは怒りながらも場所を説明してさっさと行ってしまった。

アルフはそんな二人に呆れながらもフェイトに着いていく。
もちろん竜牙はただ何の意味もなくそんなことを聞いたわけでは無い。

こういう聞き方をすればさすがのフェイトも先に行くと思ったからだ。

「……さて」

フェイトとアルフが視界から消えた後、竜牙はトイレに行く様子もなくその場でとある方向を見る。

そして何も無いはずの場所に向かって口を開いた。

「お前は……誰だ？」

時は過ぎて時の庭園のとある一室。

そこにはフェイトとプレシアの二人がいた。

だがフェイトは魔法によって拘束され、その身体には新しい傷ができています。

そしてそのフェイトの様子を母であるプレシアは見ているだけ。

それもそのはずでそのフェイトの新たな傷はプレシアが行ったことなのだから。

「ねえフェイト。この結果は何なのかしら？」

プレシアの目は娘を見る目とは到底思えない。

フェイトが集めたジュエルシードは合計3つ。

発動するまでどこにあるのか明確にはわからず、なのはという魔導師が同じものを集めている以上この結果は普通ならいいほうだろう。

「たった3つ。コレだけで何ができるというの?」

だがプレシアはそうは思わないようでフェイトを責め立てる。

「はい……母さん」

「……少しお仕置きが必要なようね」

それまで大人しくプレシアの言葉に頷いていたフェイトは、その言葉によって表情が変わる。

プレシアの持っている杖がムチへと変化したのだ。

フェイトの身に刻まれている傷もそのムチが付けたもの。

そのムチが再び、フェイトに向かって振り上げられる。

フェイトがこれから襲ってくる痛みに耐えるために目を閉じた……
そんなときだった。

ズドンッ!!

扉が破壊され、プレシアとフェイトの間に人影が入ってきてムチをその身に受ける。

起こった事態にプレシアは顔を顰めるが、その人影に攻撃してくる様子がないことからたずねる。

「いきなりやってきて……あなた何者かしら?」

「狩野竜牙。フェイトの協力者……といったところか?」

睨みあう双方。

一方は相手の実力を測って攻撃できず、もう一方はもとからそのつもりはないが突然攻撃してくれば相応の迎撃に入るという状況で動かない。

「フェイト!!」

そんな中、フェイトの使い魔であるアルフが部屋へと飛び込んで倒れ込むフェイトを抱える。

そしてその身に刻まれている傷を見るとプレシアを無言で睨んだ。

「アルフ。とりあえず戻っている」

「でも!!」

そんなアルフに指示を出す竜牙。

だがアルフは自分の主人がこんな目にあっている以上黙っているわけにもいかない。

「そんなことよりもフェイトの心配をしろ。俺はコイツと話がある」

そんなアルフの心情を悟りながらも竜牙は指示を重ねる。

アルフも自分の想いとフェイトの心配を天秤に掛けられればフェイトのほうに傾くのは当然といったところ。

「……わかったよ」

渋々としながらもアルフはフェイトを抱えてその部屋を後にした。これで部屋にはプレシアと竜牙の二人のみ。

「で？ あの人形の協力者が私に何の用かしら？」

『人形』と呼んだのはフェイトのことであろう。

それによってプレシアは竜牙がどんな反応をするのか少しでも楽しみにしていた。

疑問に思うのか、怒り出すのか。

だが竜牙はそのどちらでもなく、ただ自然にプレシアと向き合っていた。

「アルフにも言ったはずだ。あんたと話があるとな」

プレシアが内心疑問に思う間に竜牙は話し出す。

それはプレシアにとって驚愕すること。

絶対目の前の存在が知るはずのないことなのだから。

「フェイトのクローン元。アリシア・テストロッサのことだ」

「——何ですって」

「では、協力はできないと？」
「ええ。あくまで私はアリシアを人として甦らせるのだから。あな

たの方法では納得しないわ」

その後の交渉の結果は破談。

さすがに全て竜牙の望む結果にはならなかった。

「でも興味深い話は聞かせてもらったわね。その報酬くらいはあげるわよ？」

だが一定以上の信頼は得られたようだ。

そのプレシアの問いかけに竜牙は少し考える。

「ならここへの転移方法を」

「……管理局に渡すつもり？」

「そんなことはしないさ」

プレシアも竜牙がそんなことはしないとわかっているようで、とある機械を竜牙へと投げ渡した。

「それなら行きたい場所を明確にイメージした場所へ転移してくれるわ。3回しか使えず転移できる距離もそこまではないけれど。

地球と時の庭園までくらいなら大丈夫なはずよ」

「了解」

よほど信頼しているのかすぐに使用する竜牙。その足元に魔方陣が現れて転移が開始される。

転移が完了する間際、竜牙はプレシアに向かってあることを言った。

「俺に言われても止める気はないだろうが一応言っておく。身体はしっかり治すんだな」

言い切った直後、転移は完了して竜牙は時の庭園から去った。

「……………ほんと底が知れないわね」

そうため息を吐きながらもプレシアは研究を再開する。
たとえその身が減びようとも……………。

第24話 交渉（後書き）

わかりやすい伏線ですが無印の間に回収する予定はなし。
するとしてもA'sかなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7082o/>

魔法少女リリカルなのは～異世界の竜騎士～

2011年9月11日01時53分発行